

基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部の学科の設置							
フリガナ設置者	カッポホジシ トキョウノキョウガク 学校法人 東京農業大学							
フリガナ大学の名称	トキョウノキョウガク 東京農業大学 (Tokyo University of Agriculture)							
大学本部の位置	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号							
大学の目的	本大学は、その伝統及び私立大学の特性を活かしつつ、教育基本法に則り、生命科学、環境科学、情報科学、生物産業学等を含む広義の農学の理論及び応用を教授し、有能な人材を育成すると共に、前記の学術分野に関する研究及び研究者の養成をなすことを使命とする。							
新設学部等の目的	食料問題、環境問題、資源・エネルギー問題を広く俯瞰しながら生物やその生産物の持つ多面的な機能性に着目し、その利用技術、新機能性製品の開発、食農システムの構築を通じ、豊かで持続的な社会・地域・生活を、農学的な発想・知識・技術をもってデザインし、実現していくことが出来る人材を養成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	農学部 [Faculty of Agriculture]	年	人	年次人	人		年月 第年次	神奈川県厚木市船子 1737番地
	デザイン農学科 [Department of Agricultural Innovation for Sustainable Society]	4	123	—	492	学士（農学）	平成30年4月 第1年次	
計	—	125	—	500				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<p>東京農業大学 農学部</p> <p>生物資源開発学科 (125) (平成29年4月届出予定)</p> <p>バイオセラピー学科(廃止) (△140) (3年次編入学定員) (△10)</p> <p>※平成30年4月学生募集停止 (3年次編入学定員は平成31年4月学生募集停止)</p> <p>農学科〔定員減〕 (△50) (平成30年4月) (3年次編入学定員減) (△16) (平成31年4月)</p> <p>畜産学科〔定員減〕 (△40) (平成30年4月) (3年次編入学定員減) (△10) (平成31年4月)</p> <p>平成30年4月名称変更予定 農学部 畜産学科 →動物科学科 応用生物科学部 生物応用化学科 →農芸化学科 生物産業学部 生物生産学科 →北方圏農学科 アクアバイオ学科→海洋水産学科 食品香粧学科 →食香粧化学科 地域産業経営学科→自然資源経営学科</p> <p>東京農業大学大学院 農学研究科 食品安全健康学専攻(修士課程) (20) (平成29年4月届出予定)</p>							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
	農学部デザイン農学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位		
		83科目	9科目	10科目	102科目			

教	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等		
			教授	准教授	講師	助教	計			助手
新設分	農学部		5人	5人	—人	5人	15人	—	76人	平成30年4月 届出(予定)
	デザイン農学科		(5)	(5)	(—)	(4)	(14)	(—)	(47)	
	生物資源開発学科		10人	4人	—人	2人	16人	—	78	
	計		(9)	(4)	(—)	(2)	(15)	(—)	(51)	
既	農学部		10	8	—	6	24	—	104	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	農学科		(11)	(7)	(—)	(6)	(24)	(—)	(104)	
組	動物科学科		7	6	—	6	19	—	93	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	応用生物科学部 農芸化学科		(7)	(6)	(—)	(5)	(18)	(—)	(93)	
織	醸造科学科		8	5	—	7	20	—	88	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	農芸化学科		(8)	(5)	(—)	(7)	(20)	(—)	(88)	
の	醸造科学科		6	7	—	5	18	—	91	
	醸造科学科		(7)	(7)	(—)	(5)	(19)	(—)	(91)	
設	食品安全健康学科		6	6	—	6	18	—	96	
	食品安全健康学科		(6)	(6)	(—)	(6)	(18)	(—)	(96)	
の	栄養科学科		7	5	—	7	19	5	106	
	栄養科学科		(9)	(3)	(—)	(7)	(19)	(5)	(106)	
概	生命科学部 バイオサイエンス学科		10	3	—	6	19	—	66	
	バイオサイエンス学科		(11)	(2)	(—)	(6)	(19)	(—)	(54)	
分	分子生命科学科		6	5	—	3	14	—	49	
	分子生命科学科		(8)	(4)	(—)	(2)	(14)	(—)	(45)	
要	分子微生物学科		8	2	—	5	15	—	52	
	分子微生物学科		(9)	(1)	(—)	(5)	(15)	(—)	(43)	
の	地域環境科学部 森林総合科学科		9	8	—	3	20	—	84	
	森林総合科学科		(11)	(8)	(—)	(2)	(21)	(—)	(84)	
概	生産環境工学科		6	9	—	2	17	—	87	
	生産環境工学科		(7)	(9)	(—)	(2)	(18)	(—)	(87)	
分	造園科学科		6	5	—	6	17	—	86	
	造園科学科		(8)	(5)	(—)	(5)	(18)	(—)	(86)	
の	地域創成科学科		9	2	—	2	13	—	58	
	地域創成科学科		(9)	(2)	(—)	(2)	(13)	(—)	(51)	
概	国際食料情報学部 国際農業開発学科		10	5	—	5	20	—	87	
	国際農業開発学科		(13)	(4)	(—)	(3)	(20)	(—)	(87)	
分	食料環境経済学科		9	6	—	4	19	—	101	
	食料環境経済学科		(10)	(6)	(—)	(3)	(19)	(—)	(101)	
の	国際バイオビジネス学科		5	5	—	6	16	—	92	
	国際バイオビジネス学科		(7)	(5)	(—)	(5)	(17)	(—)	(92)	
概	国際食農科学科		6	4	—	3	13	—	73	
	国際食農科学科		(6)	(4)	(—)	(2)	(12)	(—)	(63)	
分	生物産業学部 北方圏農学科		7	7	—	2	16	—	57	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	北方圏農学科		(7)	(7)	(—)	(2)	(16)	(—)	(57)	
の	海洋水産学科		7	3	—	3	13	—	58	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	海洋水産学科		(7)	(3)	(—)	(3)	(13)	(—)	(58)	
概	食香粧化学科		9	5	—	0	14	—	60	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	食香粧化学科		(9)	(5)	(—)	(0)	(14)	(—)	(60)	
分	自然資源経営学科		6	5	—	2	13	—	58	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	自然資源経営学科		(6)	(5)	(—)	(2)	(13)	(—)	(58)	
要	教職・学術情報課程		7	5	—	2	14	—	42	
	教職・学術情報課程		(7)	(5)	(—)	(2)	(14)	(—)	(42)	
の	計		164	116	—	91	371	5	—	
	計		(183)	(109)	(—)	(82)	(374)	(5)	(—)	
の	合計		179	125	—	98	402	5	—	
	合計		(197)	(118)	(—)	(88)	(403)	(5)	(—)	
の	職種		専任		兼任		計			
	事務職員		141	43			184			
の	事務職員		(141)	(43)			(184)			
	技術職員		24	6			30			
の	技術職員		(24)	(6)			(30)			
	図書館専門職員		5	1			6			
の	図書館専門職員		(5)	(1)			(6)			
	その他の職員		1	3			4			
の	その他の職員		(1)	(3)			(4)			
	計		171	53			224			
の	計		(171)	(53)			(224)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	東京農業大学第一高等 学校(収容定員 1,050人、面積基準 運動場8,400㎡)、中 等部(収容定員450 人、面積基準 運動場 4,950㎡)と共用 借用面積：3,570.24 ㎡ 借用期間：60年			
	校 舎 敷 地	354,079.78㎡	0㎡	15,350.76㎡	369,430.54㎡				
	運 動 場 用 地	31,147.98㎡	30,935.81㎡	6,453.99㎡	68,537.78㎡				
	小 計	385,227.76㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	437,968.32㎡				
	そ の 他	2,664,688.34㎡	0㎡	0㎡	2,664,688.34㎡				
合 計	3,049,916.10㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	3,102,656.66㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体			
		192,787.86㎡ (190,347.54㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	192,787.86㎡ (190,347.54㎡)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体			
	103室	100室	691室	8室 (補助職員2人)	1室 (補助職員0人)				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称			室 数				
		農学部デザイン農学科			5 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕	学術雑誌 〔うち外国書〕	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	○大学所蔵図書 (大学全体での共用分 309,910〔35,059〕) ○学術雑誌、電子 ジャーナル、視聴覚資 料(全キャンパス) ○標本 学部単位での特定不 能なため、大学全体 の数	
		冊	種	種					
	農学部 デザイン農学科	227,581〔40,296〕 (211,142〔38,072〕)	11,480〔7,152〕 (11,480〔7,152〕)	7,264〔6,505〕 (7,264〔6,505〕)	7,364 (7,364)	608 (608)	33,777 (33,777)		
計	227,581〔40,296〕 (211,142〔38,072〕)	11,480〔7,152〕 (11,480〔7,152〕)	7,264〔6,505〕 (7,264〔6,505〕)	7,364 (7,364)	608 (608)	33,777 (33,777)			
図書館		面積	閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数	大学全体				
		8,026.19㎡	1,383	1,162,000					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						
		10,371.27㎡	野 球 場 2 面	テ ニ ス コ ー ト 6 面					
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書費には電子 ジャーナル・ データベースの 整備費及び雑誌 資料費を含む。
		教員1人当り研究費等	331千円	333千円	334千円	337千円	—	—	
		共同研究費等	7,172千円	7,722千円	7,760千円	7,817千円	—	—	
		図書購入費	0千円	2,058千円	4,042千円	5,985千円	7,992千円	—	
	設備購入費	14,063千円	26,100千円	16,257千円	21,711千円	18,276千円	—	—	
学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	農学部 デザイン農学科		
	1,485.6千円	1,285.6千円	1,345.6千円	1,415.6千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金収入、寄付金収入、手数料収入 等						
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	東 京 農 業 大 学							
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地
	農学部	年	人	年次 人	人		倍		神奈川県厚木市船 子1737番地
	農学科	4	220	3年次 16	912	学士(農学)	1.13	昭和24年度	同上
	畜産学科	4	180	3年次 10	740	学士(農学)	1.10	昭和24年度	同上
	バイオセラピー学科	4	140	3年次 10	580	学士(農学)	1.12	平成18年度	同上
	応用生物科学部						1.11		東京都世田谷区桜 丘1丁目1番1号
	バイオサイエンス学科	4	—	—	—	学士(応用生 物科学)	—	平成10年度	同上
	生物応用化学科	4	140	3年次 10	580	学士(応用生 物科学)	1.13	平成10年度	同上
	醸造科学科	4	140	3年次 20	600	学士(応用生 物科学)	1.15	平成10年度	同上
食品安全健康学科	4	140	3年次 10	580	学士(応用生 物科学)	1.12	平成26年度	同上	
栄養科学科	4	120	3年次 4	448	学士(応用生 物科学)	1.00	平成10年度	同上	
		平成29年度より学 生募集停止							
		平成26年度届出設 置							
		平成27年度入学定 員増(40人)							

既 設 大 学	生命科学部						1.09		同上	
	バイオサイエンス学科	4	140	—	140	学士（農学）	1.12	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	分子生命化学科	4	115	—	115	学士（農学）	1.09	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	分子微生物学科	4	115	—	115	学士（農学）	1.04	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	地域環境科学部						1.12		同上	
	森林総合科学科	4	120	3年次 6	552	学士（地域環境科学）	1.13	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（20人）
	生産環境工学科	4	120	3年次 3	546	学士（地域環境科学）	1.11	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（20人）
	造園科学科	4	120	3年次 20	580	学士（地域環境科学）	1.13	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（20人）
	地域創成科学科	4	80	—	80	学士（農学）	1.08	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	国際食料情報学部						1.13		同上	
	国際農業開発学科	4	140	3年次 10	580	学士（国際食料情報学）	1.14	平成10年度	同上	
	食料環境経済学科	4	180	3年次 10	860	学士（国際食料情報学）	1.14	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（40人）
	国際バイオビジネス学科	4	140	3年次 5	660	学士（国際食料情報学）	1.11	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（30人）
	国際食農科学科	4	100	—	100	学士（農学）	1.09	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	生物産業学部						1.13		北海道網走市八坂196番地	
	生物生産学科	4	100	3年次 10	420	学士（農学）	1.10	平成元年度	同上	
アクアバイオ学科	4	80	—	320	学士（農学）	1.14	平成18年度	同上		
食品香粧学科	4	80	3年次 12	344	学士（農学）	1.13	平成元年度	同上		
地域産業経営学科	4	90	3年次 5	370	学士（経営学）	1.16	平成元年度	同上		
等	大学の名称	東京農業大学大学院								
の 状 況	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	農学研究科 博士前期課程						1.02			
	農学専攻	2	14	—	28	修士（農学）	1.10	昭和28年度	神奈川県厚木市船子1737番地	
	畜産学専攻	2	12	—	24	修士（畜産学）	1.08	昭和61年度	同上	
	バイオセラピー学専攻	2	10	—	20	修士（バイオセラピー学）	1.00	平成22年度	同上	
	バイオサイエンス専攻	2	30	—	60	修士（バイオサイエンス）	1.00	平成14年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号	
	農芸化学専攻	2	25	—	50	修士（農芸化学）	0.94	昭和32年度	同上	
	醸造学専攻	2	12	—	24	修士（醸造学）	1.83	平成2年度	同上	
	食品栄養学専攻	2	12	—	24	修士（食品栄養学）	0.79	昭和61年度	同上	
	林学専攻	2	12	—	24	修士（林学）	0.91	昭和61年度	同上	
	農業工学専攻	2	8	—	16	修士（農業工学）	1.31	平成2年度	同上	
	造園学専攻	2	12	—	24	修士（造園学）	0.66	平成2年度	同上	
	国際農業開発学専攻	2	12	—	24	修士（国際農業開発学）	1.54	平成2年度	同上	
	農業経済学専攻	2	10	—	20	修士（農業経済学）	0.35	昭和28年度	同上	
国際バイオビジネス学専攻	2	12	—	24	修士（国際バイオビジネス学）	0.95	平成14年度	同上		

既 設 大 学 等	農学研究科 博士後期課程						0.35		神奈川県厚木市船 子1737番地		
	農学専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.20	昭和37年度	同上		
	畜産学専攻	3	4	—	12	博士（畜産 学）	0.33	平成2年度	同上		
	バイオセラピー学専攻	3	3	—	9	博士（バイオ セラピー学）	0.22	平成24年度	同上		
	バイオサイエンス専攻	3	6	—	18	博士（バイオ サイエンス）	0.38	平成16年度	東京都世田谷区桜 丘1丁目1番1号		
	農芸化学専攻	3	5	—	15	博士（農芸化 学）	0.06	昭和34年度	同上		
	醸造学専攻	3	2	—	6	博士（醸造 学）	0.33	平成14年度	同上		
	食品栄養学専攻	3	2	—	6	博士（食品栄 養学）	1.00	平成14年度	同上		
	林学専攻	3	4	—	12	博士（林学）	0.25	平成2年度	同上		
	農業工学専攻	3	2	—	6	博士（農業工 学）	0.50	平成14年度	同上		
	造園学専攻	3	3	—	9	博士（造園 学）	0.55	平成14年度	同上		
	国際農業開発学専攻	3	2	—	6	博士（国際農 業開発学）	1.33	平成14年度	同上		
	農業経済学専攻	3	5	—	15	博士（農業経 済学）	0.33	昭和37年度	同上		
	国際バイオビジネス学専攻	3	5	—	15	博士（国際バイオビ ジネス学）	0.20	平成16年度	同上		
	環境共生学専攻	3	5	—	15	博士（環境共 生学）	0.33	平成2年度	同上		
	生物産業学研究科 博士前期課程							1.12		北海道網走市八坂 196番地	
	生物生産学専攻	2	7	—	14	修士（生物産 業学）	0.49	平成22年度	同上		
	アクアバイオ学専攻	2	5	—	10	修士（生物産 業学）	1.00	平成22年度	同上		
食品香粧学専攻	2	5	—	10	修士（生物産 業学）	1.40	平成22年度	同上			
産業経営学専攻	2	3	—	6	修士（経営 学）	2.33	平成22年度	同上			
生物産業学研究科 博士後期課程									同上		
生物産業学専攻	3	8	—	24	博士（生物産業学又 は経営学）	0.20	平成7年度	同上			
の 状 況	大 学 の 名 称	東 京 情 報 大 学									
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	取容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地		
	総合情報学部	年	人	年次 人	人		倍		千葉県千葉市若葉区 御成台4丁目1番地		
	情報システム学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成13年度	同上	平成25年度より学 生募集停止	
	環境情報学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成13年度	同上	平成25年度より学 生募集停止	
	情報ビジネス学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成13年度	同上	平成25年度より学 生募集停止	
	情報文化学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成8年度	同上	平成25年度より学 生募集停止	
	総合情報学科	4	400	10	1,920	学士（総合情 報学）	0.97	平成25年度	同上	平成29年度入学定 員減（100人）	
看護学部											
看護学科	4	100	—	100	学士（看護 学）	1.23	平成29年度	同上	平成29年度認可		

既設大学	大学の名称	東京情報大学大学院							所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		
		年	人	年次人	人		倍			
	総合情報学研究科 博士前期課程 総合情報学専攻	2	15	—	30	修士（総合情報学）	0.36	平成4年度		千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地 同上
総合情報学研究科 博士後期課程 総合情報学専攻	3	3	—	9	博士（総合情報学）	0.44	平成11年度	同上		
等	大学の名称	東京農業大学短期大学部							所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		
		年	人	年次人	人		倍			
	短期大学部						—			東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号
の状況	生物生産技術学科	2	—	—	—	短期大学士（生物生産技術学）	—	平成4年度	同上	平成29年度より学生募集停止
	環境緑地学科	2	—	—	—	短期大学士（環境緑地学）	—	平成4年度	同上	平成29年度より学生募集停止
	醸造学科	2	—	—	—	短期大学士（醸造学）	—	平成4年度	同上	平成29年度より学生募集停止
附属施設の概要	名称 （所在地）	目的 （規模等）					設置年月			
	1 図書館 （東京都世田谷区桜丘1-1-1）	学生の学習・研究活動の支援施設					平成26年4月			
	学術情報センター（図書館） （神奈川県厚木市船子1737）	学生の学習・研究活動の支援施設					平成10年4月			
	学術情報センター（図書館） （北海道網走市八坂196）	学生の学習・研究活動の支援施設					平成元年4月			
	2 農学部附属施設									
	農学研究所 （神奈川県厚木市船子1737）	農業・園芸・畜産・動植物研究					平成10年4月			
	食品加工技術センター （神奈川県厚木市船子1737）	食品加工に関する実践的教育・研究					平成16年4月			
	伊勢原農場 （神奈川県伊勢原市三ノ宮前畑）	作物・園芸・環境緑化等の研究・実習 1499-1 他 (79, 910, 22㎡)					平成24年4月			
	富士農場 （静岡県富士宮市麓422）	畜産実習を中心とした実習教育 (323, 260.00㎡)					昭和17年			
	植物園 （神奈川県厚木市船子1737）	有用植物の収集・保存・展示					昭和22年			
バイオセラピーセンター （神奈川県厚木市船子1737）	人と動植物のかかわりを追求する教育・研究					平成19年4月				
電子顕微鏡室 （神奈川県厚木市船子1737）	ウイルス・微生物等の微細構造解析					平成10年4月				
動物衛生管理室 （神奈川県厚木市船子1737）	飼養動物の衛生管理およびワクチン・消毒指導の情報提供									

附属施設の概要	3 応用生物科学部の附属施設		
	応用生物科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学科共通分野の総合的な研究機関	平成10年4月
	食品加工技術センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成10年4月
	アイソトープセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	動植物・微生物のトレーサー実験等	平成10年4月
	4 生命科学部の付属施設		
	生命科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)		平成29年4月
	菌株保存室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	研究・応用利用に関する微生物の保存・管理	平成10年4月
	高次生命機能解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	遺伝子組換え、栄養、生理、遺伝、発生など生命科学分野の研究	平成21年4月
	5 地域環境科学部の附属施設		
	地域環境研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学部横断的・総合的な研究	平成10年4月
	奥多摩演習林 (東京都西多摩郡奥多摩町氷川2137 (653, 016. 00㎡))	森林のしくみ、育成方法、林業機械の実習等	昭和53年
	生物環境調節室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	植物の育成・生理環境に関する研究	平成10年4月
	電子顕微鏡室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	ウイルス・微生物等の微細構造解析	平成10年4月
6 国際食料情報学部の附属施設			
国際食料情報研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学部共通の課題の総合的な研究	平成10年4月	
宮古亜熱帯農場 (沖縄県宮古島市城辺字福里72-2) (98, 262. 00㎡)	熱帯農業の実習教育・試験研究	昭和63年	
7 生物産業学部の附属施設			
生物資源開発研究所 (北海道網走市八坂196)	地域に根ざした生物産業・資源の研究	平成18年2月	
食品加工技術センター (北海道網走市八坂196)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成16年4月	
網走寒冷地農場 (北海道網走市音根内59-8) (432, 174. 00㎡)	寒冷地大規模農場の実習教育	昭和57年	
オホーツク臨海研究センター (北海道網走市能取港町1-1-2)	海洋動植物の生態・生育・繁殖に関する研究 (4, 656. 60㎡)	平成18年4月	
8 総合研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	全学的な研究戦略の推進・実践	平成12年4月	
9 エクステンションセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	社会に対し多様な生涯学習の提供	平成10年4月	
10 コンピュータセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	情報処理に関する教育・研究	平成10年4月	
11 国際協力センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	海外研究機関との交流ならびに協力連携	平成18年4月	
12 「食と農」の博物館 (東京都世田谷区上用賀2-4-28)	教育・研究の成果を広く社会に公開	平成16年4月	
13 生物資源ゲノム解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	本学及び学外との共同利用・共同研究の企画、支援等	平成28年4月	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専門教育科目	創生型科目	農業インターンシップ (一)	1前	2				○								兼1		
		農業インターンシップ (二)	1後	2				○								兼1		
		小計 (11科目)	—	9	14	0		—		5	5	0	4	0		兼8		
	専門基礎科目	デザイン農学概論	1前	2				○		5							オムニバス	
		バイオテクノロジー論	1後	2				○		1								
		サステナビリティ農学	1後	2				○		1								
		畜産物利用論	2前	2				○		1			2				オムニバス	
		農産物利用論	2前	2				○		1	1		1				オムニバス	
		生活デザイン農学	2前	2				○		1	2						オムニバス	
		デザイン農学基礎実験実習・演習	2前	3					○	5	5		5				※演習 共同	
		食品化学	2前	2				○		1			2				オムニバス	
		デザイン農学栽培入門	2前		2				○	1	1		1				オムニバス	
		デザイン農学専攻別実験実習・演習	2後	3					○	5	5		5				※演習 オムニバス・ 共同 (一部)	
		実験計画法	2後	2					○			2		2			兼1	オムニバス
		社会デザイン農学	2後	2					○		1	1		1			オムニバス	
		活用動物飼育学	2後	2	2				○		1			1			オムニバス	
		食品分析学	3前	2					○		1						オムニバス	
		小計 (14科目)	—	26	4	0		—		5	5	0	5	0		兼1		
	専門コア科目	生物介在療法学	2後	2				○			2						オムニバス	
		サイエンスコミュニケーション論	2後	2				○					1				オムニバス	
		栄養調理学	2後	2	2			○		1	1		1				オムニバス	
		食品管理学	2後	2	2			○		2	1		2				オムニバス	
		バイオミクリー論	3前	2	2			○		1	1						オムニバス	
		ESD概論	3前	2	2			○		1	1		2				オムニバス	
		農福区連携デザイン農学	3前	2	2			○				2	1	1			オムニバス	
		食品機能学	3後	2	2			○		2	1		2				オムニバス	
		食品微生物学	3後	2	2			○		1			2				オムニバス	
		生き物活用法	3後	2	2			○		1	2						オムニバス	
		小計 (10科目)	—	4	16	0		—		5	5	0	5	0		—		
	学際領域科目	動物管理学	1後	2				○					1			兼3	オムニバス	
		農業気象学	2前	2				○								兼1	集中	
		植物栄養学	2前	2				○								兼1		
		動物解剖学	2前	2				○				1				兼3	オムニバス	
		植物生理生態学	2後	2				○								兼1		
		農業経営学	3前	2				○								兼1		
		生命科学	3前	2				○								兼1		
		自然再生技術論	3前	2				○								兼1		
		植物生長調節論	3後	2				○								兼1		
		分子生物学	3後	2				○								兼5	オムニバス	
		農産物マーケティング論	3後	2				○								兼1		
		植物防疫論	3後	2				○								兼1		
			小計 (12科目)	—	0	24	0		—		0	1	0	1	0		兼19	
	総合化科目	専攻基礎実験実習・演習 (一)	3前	3					○	5	5		5				共同 ※演習	
		専攻基礎実験実習・演習 (二)	3後	3					○	5	5		5				共同 ※演習	
		専攻応用実験実習・演習 (一)	4前	3					○	5	5		5				共同 ※演習	
		専攻応用実験実習・演習 (二)	4後	3					○	5	5		5				共同 ※演習	
		卒業論文	4通	4					○	5	5		5					
		小計 (5科目)	—	16	0	0		—		5	5	0	5	0		—		
	合計 (102科目)			—	70	129	8		—	5	5	0	5	0		兼76		
	学位又は称号			学士 (農学)			学位又は学科の分野			農学関係								
	卒業要件及び履修方法						授業期間等											
	必修科目70単位、選択必修科目12単位 (人間関係科目の中から4単位、社会関係科目の中から4単位、自然関係科目の中から4単位)、選択科目42単位以上 (ただし、学科専門科目の中から14単位以上) を修得し、合計124単位以上を修得すること。(履修科目の登録の上限: 44単位 (年間))						1学年の学期区分			2学期								
							1学期の授業期間			15週								
							1時限の授業時間			90分								

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要

農学部 農学科

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
総合教育科目	導 目 入 科	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			11	6		3		共同
		情報基礎(一)	1前	2				○		2	1				共同
		情報基礎(二)	1後	2				○		2	1				共同
	課 題 別 科 目	特別講義(一)	1.2.3.4前		2			○							兼1
		特別講義(二)	1.2.3.4前		2			○							兼1
		特別講義(三)	1.2.3.4前		2			○							兼1
		特別講義(四)	1.2.3.4前		2			○							兼1
		インターナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○							兼13
		インターナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○							兼1 オムニバス
	英 語 科 目	英語(一)	1前	2				○			1				兼6
		英語(二)	1後	2				○			1				兼6
		英語(三)	2前	2				○			1				兼6
		英語(四)	2後	2				○			1				兼6
		英語リーディング(一)	1前		2			○							兼3
		英語リーディング(二)	1後		2			○			1				兼2
		TOEIC英語(一)	3前		2			○							兼3
		TOEIC英語(二)	3後		2			○							兼3
		英会話(一)	2前		2			○							兼3
		英会話(二)	2後		2			○							兼3
	ビジネス英語	4前		2			○							兼1	
科学英語	4前		2			○			1						
学 部 共 通	初 修 外 国 語 科 目	中国語(一)	2前		2			○							兼2
		中国語(二)	2後		2			○							兼2
		ドイツ語(一)	2前		2			○							兼2
		ドイツ語(二)	2後		2			○							兼2
		フランス語(一)	2前		2			○							兼2
		フランス語(二)	2後		2			○							兼2
		スペイン語(一)	2前		2			○							兼2
		スペイン語(二)	2後		2			○							兼2
全 学 共 通	関 係 ポ ー ツ 科 目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1										兼2
		スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1										兼2
	就 職 準 備 目 科 習 演	キャリアデザイン	2後		1			○							兼1
		インターンシップ	3通		1			○		11	6		3		共同
	ビジネスマナー	3前		1			○							兼1	
	共通演習	1後	1					○	11	6		3		共同	
学 部 共 通	リ メ デ イ ア ル 科 目	基礎生物	1前			2		○							兼1
		基礎化学	1前			2		○							兼1
		基礎数学	1前			2		○							兼1
		文章表現	1後			2		○							兼1
小計(39科目)			—	15	49	8	—			11	7	0	3	0	兼42
専 門 教 育 科 目	専 門 基 礎 科 目	農学原論	1前	2				○		1					兼1
		環境科学	3前		2			○							兼1
		生物化学	2後		2			○		1					兼6
		動物福祉	2後		2			○							兼3
		動植物園論	3後		2			○							兼3
		健康福祉概論	1前		2			○							兼1
		心理学概論	1後		2			○							兼1
		知的財産論	3前		2			○							兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目	創生型 科目	実学的生命活用	3前	2		○			11	6		3			共同	
		農業ビジネスデザイン(一)	1前	2		○			1	1		1		兼5	オムニバス	
		農業ビジネスデザイン(二)	1後	2		○			1	1		1		兼5	オムニバス	
	学部専門 学際領域科目	農業経営学	3前	2		○								兼1		
		植物生理生態学	2後	2		○			1			1			オムニバス	
		植物生長調節論	3後	2		○			2							
		生命科学	3前	2		○								兼1		
		分子生物学	3後	2		○								兼1		
		自然再生技術論	3前	2		○								兼1		
	小計(17科目)		—	2	32	0	—		12	6	0	3	0	兼21		
	学科基礎	人間関係 科目	生命倫理	2後	2		○								兼1	
			科学と哲学	3前	2		○								兼1	
			芸術	1前	2		○								兼1	
			文化人類学	2前	2		○								兼1	
		社会関係 科目	日本国憲法	1後	2		○								兼1	
			経済入門	1後	2		○								兼1	
			現代社会の諸問題	2後	2		○								兼1	
国際関係を考える			2前	2		○								兼1		
自然関係 科目		生物学	1前	2		○			2	2		2			オムニバス	
		化学	1前	2		○			1							
		数学	1後	2		○								兼1	オムニバス	
		物理学	1後	2		○								兼1		
		地学	2前	2		○								兼1		
小計(13科目)		—	0	26	0	—		2	2	0	2	0	兼9			
学科専門	専門基礎科目	実験計画法	3前	2				○	2	1					オムニバス	
		農業気象学	2前	2		○								兼1		
		作物生産学	1前	2		○			1	1					オムニバス	
		土壌学	1前	2		○								兼1		
		植物栄養学	2前	2		○								兼1		
		遺伝学	1前	2		○				1						
		育種学	1後	2		○			1	2					オムニバス	
		植物病理学	1後	2		○			2			1			オムニバス	
		昆虫学	1後	2		○			2	1					オムニバス	
		園芸学(一)	1前	2		○			2	2		1			オムニバス	
		園芸学(二)	1後	2		○			3			1			オムニバス	
		生物学実験	2通	2				○	7	3		2		兼1	オムニバス	
		農業実習(一)	1通	2				○	1	4		1		兼1	共同	
		農業実習(二)	2通	2				○	2	2		1			共同	
	雑草学	3前	2		○								兼1			
	農産物マーケティング論	3後	2		○								兼1			
	植物防疫論	3後	2		○								兼1			
小計(17科目)		—	22	12	0	—		12	6	0	4	0	兼8			
学科専門	農業生産科学コース 専門コア科目	食用作物学(一)	2前	2		○			1			1				
		食用作物学(二)	2後	2		○			1			1				
		工芸作物学	2前	2		○								兼1		
		草地・飼料作物学	2後	2		○				1						
		植物育種学	2後	2		○			1							
		植物病原微生物学(一)	2後	2		○			2			1			オムニバス	
		植物病原微生物学(二)	3前	2		○			2			1			オムニバス	
		昆虫生態学	3後	2		○			1							
		昆虫分類学	2後	2		○				1						
		昆虫機能利用学	3前	2		○			1							
		作物学実験(一)	3前					○	1	1		1			共同	
		遺伝育種学実験(一)	3前	2				○	1	2					共同	
		植物病理学実験(一)	3前					○	2			1			共同	
昆虫学実験(一)	3前					○	2	1					オムニバス			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	農学生産科学コース	作物学実験(二)	3後					○	1	1		1		共同	
		遺伝育種学実験(二)	3後	2				○	1	2				共同	
		植物病理学実験(二)	3後					○	2			1		共同	
		昆虫学実験(二)	3後					○	2	1				オムニバス	
	専門コア科目	園芸生産科学コース	果樹園芸学	2前		2		○		1					兼1
			果樹栽培論	2後		2		○		1	1				
			野菜園芸学	2前		2		○			1			1	
			野菜栽培論	2後		2		○						1	
			花卉園芸学	2前		2		○			1				
			花卉栽培論	2後		2		○				1			
			バイオナーサリー論	2前		2		○		1					
			園芸環境植物学	2前		2		○						1	兼1
			ポストハーベスト論	2後		2		○		2					オムニバス
			園芸生産実験(一)	3前	2				○	2	2		1		オムニバス
	園芸機能開発実験(一)	3前					○	3			1		オムニバス		
	園芸生産実験(二)	3後	2				○	2	2		1		オムニバス		
	園芸機能開発実験(二)	3後					○	3			1		共同		
	小計(31科目)			4	38	0			5	2		2		兼2	
	学科学科専門	農学生産科学コース	作物学演習(一)	3前				○		1	1		1		共同
			遺伝育種学演習(一)	3前	4				○	1	2				共同
			植物病理学演習(一)	3前					○	2			1		共同
			昆虫学演習(一)	3前					○	2	1				共同
			作物学演習(二)	3後					○	1	1		1		共同
			遺伝育種学演習(二)	3後	4				○	1	2				共同
			植物病理学演習(二)	3後					○	2			1		共同
昆虫学演習(二)			3後					○	2	1				共同	
作物学演習(三)			4前					○	1	1		1		共同	
遺伝育種学演習(三)			4前	4				○	1	2				共同	
植物病理学演習(三)			4前					○	2			1		共同	
昆虫学演習(三)			4前					○	2	1				共同	
作物学演習(四)		4後					○	1	1		1		共同		
遺伝育種学演習(四)		4後	4				○	1	2				共同		
植物病理学演習(四)		4後					○	2			1		共同		
昆虫学演習(四)		4後					○	2	1				共同		
園芸生産科学コース		園芸生産演習(一)	3前	4				○	2	2		1		共同	
		園芸機能開発演習(一)	3前					○	3			1		共同	
		園芸生産演習(二)	3後	4				○	2	2		1		共同	
		園芸機能開発演習(二)	3後					○	3			1		共同	
		園芸生産演習(三)	4前	4				○	2	2		1		共同	
		園芸機能開発演習(三)	4前					○	3			1		共同	
園芸生産演習(四)		4後	4				○	2	2		1		共同		
園芸機能開発演習(四)		4後					○	3			1		共同		
卒業論文		4通	4					○	11	6		3			
小計(25科目)			—	20	0	0	—	11	6	0	4	0	—		
合計(142科目)			—	63	157	8	—	13	7	0	4	0	兼79		
学位または称号	学士(農学)		学位または学科の分野				農学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
必修科目63単位、学科基礎科目の人間関係科目から4単位、社会関係科目から4単位、自然関係科目から4単位を修得しその他の選択科目から49単位以上を修得し合計124単位以上を修得すること。 ※リメディアル教育科目の修得単位は卒業要件単位に含めない。 【コース別の履修について】 ※専門コア科目の実験(一)(二)は、各自が所属する分野の実験科目を必修とする。 ※総合化科目の演習(一)・(二)・(三)・(四)は、各自が所属する分野の演習科目を必修とする。							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

教 育 課 程 等 の 概 要

農学部 畜産学科

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導 目入 科	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			9	2		6		兼1 兼1	共同
		情報基礎(一)	1前	2				○							兼1	
		情報基礎(二)	1後	2				○							兼1	
	課 題 別 科 目	特別講義(一)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(二)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(三)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(四)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		インターナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○							兼13	オムニバス
		インターナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○							兼1	
	英 語 科 目	英語(一)	1前	2				○							兼6	
		英語(二)	1後	2				○							兼6	
		英語(三)	2前	2				○							兼6	
		英語(四)	2後	2				○							兼6	
		英語リーディング(一)	1前		2			○							兼2	
		英語リーディング(二)	1後		2			○							兼2	
		TOEIC英語(一)	3前		2			○							兼3	
		TOEIC英語(二)	3後		2			○							兼3	
		英会話(一)	2前		2			○							兼2	
		英会話(二)	2後		2			○							兼2	
	ビジネス英語	4前		2			○							兼1		
科学英語	4前		2			○							兼1			
初 修 外 国 語 科 目	中国語(一)	2前		2			○							兼2		
	中国語(二)	2後		2			○							兼2		
	ドイツ語(一)	2前		2			○							兼2		
	ドイツ語(二)	2後		2			○							兼2		
	フランス語(一)	2前		2			○							兼2		
	フランス語(二)	2後		2			○							兼2		
	スペイン語(一)	2前		2			○							兼2		
	スペイン語(二)	2後		2			○							兼2		
ス ポ ー ツ 科 目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1				○						兼2		
	スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1				○						兼2		
	就 職 準 備 科 目	キャリアデザイン	2後		1			○							兼1	
		インターンシップ	3通		1			○		9	2		6		兼1	共同
ビジネスマナー		3前		1			○							兼1		
演 習 科 目	共通演習	1後	1				○		9	2		6			共同	
リ メ デ イ ア ル 学 部 共 通	基礎生物	1前			2		○							兼1		
	基礎化学	1前			2		○							兼1		
	基礎数学	1前			2		○							兼1		
	文章表現	1後			2		○							兼1		
	小計(39科目)	—	15	49	8		—		9	2	0	6	0	兼42		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専門教育科目	学部専門	専門基礎科目	農学原論	1前	2		○			1								
			環境科学	3前		2		○									兼1	
			生物化学	2後		2		○									兼1	
			動物福祉	2後		2		○			1						兼5	オムニバス
			動植物園論	3後		2		○									兼3	オムニバス
			健康福祉概論	1前		2		○									兼1	
			心理学概論	1後		2		○									兼1	
			知的財産論	3前		2		○									兼1	
	創生型科目	実学的生命活用	3前		2		○			9	2		6				共同	
		農業ビジネスデザイン(一)	1前		2		○						1			兼7	オムニバス	
		農業ビジネスデザイン(二)	1後		2		○						1			兼7	オムニバス	
	学際領域科目	農業経営学	3前		2		○									兼1		
		植物生理生態学	2後		2		○									兼2		
		植物生長調節論	3後		2		○									兼2	オムニバス	
		生命科学	3前		2		○									兼1		
		分子生物学	3後		2		○									兼1		
		自然再生技術論	3前		2		○									兼1		
小計(17科目)			—	2	32	0	—	—	9	2	0	6	0	兼26				
専門教育科目	人間関係	生命倫理	2後		2		○								兼1			
		科学と哲学	3前		2		○								兼1			
		芸術	1前		2		○								兼1			
		文化人類学	2後		2		○								兼1			
	社会科学	日本国憲法	1後		2		○								兼1			
		経済入門	1前		2		○								兼1			
		現代社会の諸問題	2後		2		○								兼1			
	自然科学	国際関係を考える	2前		2		○								兼1			
		生物学	1前		2		○			3	1		3		兼1			
		化学	1前		2		○								兼2	オムニバス		
		数学	1後		2		○											
		物理学	1後		2		○								兼1			
		地学	2後		2		○								兼1			
小計(13科目)			—	0	26	0	—	—	3	1	0	3	0	兼10				
学部専門		専門基礎科目	畜産概論	1前	2		○			6	1							オムニバス
	動物解剖組織学		1前	2		○				2			1					
	化学実験		1後	2				○		2			2			共同		
	生物学実験		1後	2				○		4	2		4			兼1	オムニバス	
	生化学		1後	2			○			4	2		2					
	生物統計学		2後	2			○			1			1				オムニバス	
	畜産実習(一)		1前	1				○		7	3		6			共同		
	畜産実習(二)		3前	1				○		7	3		6			共同		
	畜産実習概論		1前	2			○			1	1		1				オムニバス	
	家畜品種論		1前	2			○			2			1				オムニバス	
	特用家畜論		3後		2		○			2			1				オムニバス	
	実験動物学		1前		2		○								兼1			
	家畜栄養学		1前		2		○			1	1		1				オムニバス	
	家畜微生物学		3前		2		○				1		1				オムニバス	
	草地学		2前		2		○								兼1			
	食品衛生学		3後		2		○				1		1			兼2	オムニバス	
	動物発生工学		3後		2		○			1			1				オムニバス	
	畜産関連法規		3後		2		○			1								
小計(18科目)			—	18	16	0	—	—	8	4	0	6	0	兼5				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門教育科目	生命科学分野の科目	動物生殖学(一)	2前	2			○			2							オムニバス
		動物生殖学(二)	2後	2			○			2							オムニバス
		生殖補助技術論	3前		2			○			1			1			オムニバス
		動物遺伝育種学(一)	2前	2				○			2				1		オムニバス
		動物遺伝育種学(二)	2後	2				○			2				1		オムニバス
		動物遺伝資源学	2前		2			○			1	1		1			オムニバス
		動物生理学(一)	1後	2				○			1	1		1			オムニバス
		動物生理学(二)	2前	2				○			1	1			1		オムニバス
		動物免疫学	3前		2			○			1				1		オムニバス
		動物生理化学	3後		2			○			1	1			1		オムニバス
	生産科学分野の科目	動物飼養学(一)	2前	2				○							1		兼1
		動物飼養学(二)	2後	2				○			1						兼1
		飼料学	1後		2			○									兼1
		家畜管理学	1後		2			○			1			1			兼1
		畜産物利用学(一)	2前	2				○			1			1			兼1
		畜産物利用学(二)	2後	2				○			1			1			兼1
		食品微生物学	2後		2			○			1			1			兼1
		動物性食品機能学	3前		2			○			1			1			兼1
		動物衛生学(一)	2前	2				○				1			1		オムニバス
		動物衛生学(二)	2後	2				○				1			1		オムニバス
	動物産業経営学(一)	2前	2				○			2							
	動物産業経営学(二)	2後	2				○			2							
	市場流通論	3前		2			○			1							
小計(23科目)		—	28	18	0		—		9	2	0	6	0		兼2		
総合化科目	畜産学実験実習・演習(一)	2前	2					○	9	2			6				
	畜産学実験実習・演習(二)	3通	2					○	10	2			6				
	畜産学実験実習・演習(三)	4通	2					○	10	2			6				
	卒業論文	4通	4					○	9	3			6				
小計(4科目)		—	10	0	0		—		10	3	0	6	0		兼0		
合計(114科目)		—	73	141	8		—		10	4	0	6	0		兼78		
学位または称号	学士(農学)	学位または学科の分野				農学関係											
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
必修科目73単位、学科基礎科目の人間関係科目から4単位、社会関係科目から4単位、自然関係科目から4単位を修得しその他の選択科目から39単位以上を修得し合計124単位以上を修得すること。 リメディアル教育科目の修得単位は卒業要件単位に含めない。						1学年の学期区分			2学期								
						1学期の授業期間			15週								
						1時限の授業時間			90分								

教 育 課 程 等 の 概 要

農学部 バイオセラピー学科

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導 目 入 科	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			8	5		1		兼1	共同
		情報基礎(一)	1前	2				○							兼1	
		情報基礎(二)	1後	2				○							兼1	
	課 題 別 科 目	特別講義(一)	1.2.3.4前		2			○		1						
		特別講義(二)	1.2.3.4前		2			○		1						
		特別講義(三)	1.2.3.4前		2			○		1						
		特別講義(四)	1.2.3.4前		2			○		1						
		国際ナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○							兼13	オムニバス
		国際ナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○							兼1	
	英 語 科 目	英語(一)	1前	2				○							兼5	
		英語(二)	1後	2				○							兼5	
		英語(三)	2前	2				○							兼5	
		英語(四)	2後	2				○							兼5	
		英語リーディング(一)	1前		2			○							兼2	
		英語リーディング(二)	1後		2			○							兼2	
		TOEIC英語(一)	3前		2			○							兼3	
		TOEIC英語(二)	3後		2			○							兼3	
		英会話(一)	2前		2			○							兼2	
		英会話(二)	2後		2			○							兼2	
ビジネス英語	4前		2			○							兼1			
科学英語	4前		2			○							兼1			
初 修 外 国 語 科 目	中国語(一)	2前		2			○							兼2		
	中国語(二)	2後		2			○							兼2		
	ドイツ語(一)	2前		2			○							兼2		
	ドイツ語(二)	2後		2			○							兼2		
	フランス語(一)	2前		2			○							兼2		
	フランス語(二)	2後		2			○							兼2		
	スペイン語(一)	2前		2			○							兼2		
	スペイン語(二)	2後		2			○							兼2		
ス ポ ー ツ 科 目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1				○						兼2		
	スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1				○						兼2		
就 職 準 備 科 目	キャリアデザイン	2後		1			○							兼1		
	インターンシップ	3通		1			○		5	2				兼1	共同	
	ビジネスマナー	3前		1			○							兼1		
演 習 科 目	共通演習	1後	1				○		8	5		1			共同	
リ メ デ ィ ア ル 教 育 科 目	基礎生物	1前			2		○							兼1		
	基礎化学	1前			2		○							兼1		
	基礎数学	1後			2		○							兼1		
	文章表現	1後			2		○							兼1		
	小計(39科目)	—	15	49	8		—		8	5	0	1	0	兼43		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
学部専門	専門共通科目	農学原論	1前	2			○			2							オムニバス
		環境科学	3前		2			○									兼1
		生物化学	2後		2			○									兼1
		動物福祉	2後		2			○		1	2						兼3
		動植物園論	3後		2			○		1							兼2
		健康福祉概論	1前		2			○									兼1
		心理学概論	1後		2			○									兼1
		知的財産論	3前		2			○									兼1
	創生型科目	実学的生命活用	3前		2			○		12	5		2				共同
		農業ビジネスデザイン(一)	1前		2			○		2	1						兼5
		農業ビジネスデザイン(二)	1後		2			○		2	1						兼5
	学際領域科目	農業経営学	3前		2			○									兼1
		植物生理生態学	2後		2			○									兼2
		植物生長調節論	3後		2			○									兼2
		生命科学	3前		2			○									兼1
		分子生物学	3後		2			○			1						
		自然再生技術論	3前		2			○									兼1
小計(17科目)			—	2	32	0	—			12	5	0	2	0		兼21	
専門基礎	人間関係	生命倫理	2後		2			○									兼1
		科学と哲学	3前		2			○									兼1
		芸術	1前		2			○									兼1
		文化人類学	2後		2			○									兼1
	社会関係	日本国憲法	1後		2			○									兼1
		経済入門	1前		2			○									兼1
		現代社会の諸問題	2後		2			○									兼1
		国際関係を考える	2前		2			○									兼1
	自然関係	生物学	1前		2			○									兼1
		化学	1前		2			○									兼1
		数学	1後		2			○									兼1
		物理学	1後		2			○									兼1
		地学	2後		2			○									兼1
小計(13科目)			—	0	26	0	—									兼10	
学科学専門	専門基礎科目	バイオセラピー概論	1前	2			○		10	1							オムニバス
		生物学実験	2通	2					○	8	5		2	1			共同
		化学実験	2後		2				○	2	1		2				共同
		植物共生学	1前	2				○		2	1						オムニバス
		人間植物関係学	1後	2				○		1	1		1				オムニバス
		野生動物学	1前	2				○		3							
		伴侶動物学	1後	2				○		2			1				オムニバス
		動物介在療法学(一)	1後	2				○		1	2						オムニバス
		植物介在療法学(一)	1前	2				○		2	1						オムニバス
		ボランティア論	1前		2			○		1	1						兼3
		生物保全学	2後		2			○		2							オムニバス
		家畜生理・生体機構学	2前		2			○		1	1						オムニバス
		遺伝学	1前		2			○		1							
		人体生理学	2後		2			○									兼1
		生物統計学	3前		2			○		1							
		生物環境関係法規	3後		2			○		1							兼1
		動物行動学	3後		2			○		1			1				オムニバス
		小児発達と生き物	1後		2			○					1				兼1
		農業実習(一)	1前	2						○	9	5		2	1		兼1
		農業実習(二)	1後	2						○	8	5		2	1		兼21
		民族植物学	3前		2			○									兼1
小計(21科目)			—	20	22	0	—			12	5	0	2	1		兼9	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目 学科専門	植物共生分野の科目	有用植物資源学	2後	2		○			1							
		植物系統・進化学	2前	2		○				1						
		植物形態・分類学	3後	2		○			1							
		社会園芸学	2前	2		○			1	1		1				オムニバス
		都市園芸学	2後	2		○			1	1		1				オムニバス
		野菜・草花の育て方	3後	2		○			1	1		1				オムニバス
		果樹・樹木の育て方	2後	2		○									兼1	
		ハーブの育て方	2前	2		○				1			1			オムニバス
	動物共生分野の科目	野生動物生態学	1後		2		○			1						
		動物資源学	3後		2		○			2						オムニバス
		動物形態・分類学	3前		2		○			1					兼2	オムニバス
		伴侶動物ブリーディング論	3前		2		○			1						
		家畜管理学	2前		2		○			1			1			オムニバス
		家畜栄養学	2前		2		○								兼1	オムニバス
	生物介在療法分野の科目	植物介在療法学(二)	2前		2		○			2	1					オムニバス
		園芸植物活用法	3前		2		○								兼1	
		動物介在療法学(二)	3前		2		○			1	2				兼1	オムニバス
		介在療法動物論	2前		2		○			1	2					オムニバス
		リハビリテーション医学概論	2後		2		○			1						
		社会福祉概論	2後		2		○								兼1	
		療法の場の設計	2前		2		○								兼1	
		生物介在療法評価法	2後		2		○			2	3		1			オムニバス
		看護・介護概論	2前		2		○								兼1	
小計(23科目)		—	0	46	0	—			12	5	0	2	0	兼9		
総合化科目	分野別基礎実験・実習	2通	2					○	10	5		2	1		共同	
	分野別実験・実習・演習	3通	6					○	12	5		2	1	兼3	共同	
	分野別応用実験・実習・演習	4通	6					○	12	5		2	1		共同	
	卒業論文	4通	4					○	12	5		2	1		共同	
小計(4科目)		—	18	0	0	—			12	5	0	2	1	兼3		
合計(117科目)		—	55	175	8	—			12	5	0	2	1	兼90		
学位または称号	学士(農学)	学位または学科の分野				農学関係										
卒業要件及び履修方法						授業期間等										
必修科目55単位、学科基礎科目の人間関係科目から4単位、社会関係科目から4単位、自然関係科目から4単位を修得しその他の選択科目から57単位以上を修得し合計124単位以上を修得すること。 リメディアル教育科目の修得単位は卒業要件単位に含めない。						1学年の学期区分			2学期							
						1学期の授業期間			15週							
						1時限の授業時間			90分							

授 業 科 目 の 概 要				
（農学部デザイン農学科）				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
総合教育科目 全学共通科目 導入科目	フレッシュマンセミナー	建学の精神、教育理念、教育目的・目標及び教育課程の体系を理解すること、並びに教員とのコミュニケーションを通じて個々の学習目的を自覚し、学習意欲を高める動機付けとすることを目的とした科目である。大学で学ぶために必要な情報の収集・整理方法やプレゼンテーションの技法の基礎を習得する。また、大学生活や学習習慣の基本的事項（情報倫理、自己管理・時間管理能力、受講態度、礼儀・マナー、精神ケア）を理解する。 さらに社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観、職業意識を涵養し、学士課程修了後のキャリアプランを実現させるための就職活動の進め方や進学準備方法などを理解する。	共同	
	共通演習	基礎演習に引き続き、高等学校の受動的な学習態度から、能動的で自律的・主体的な学習方法を習得することを目的とした科目である。大学で学ぶための必要な技法として、情報の収集・整理（文献・情報検索、フィールドワーク・調査・実験）の方法、読解・文献講読の方法、問題発見・解決に必要な思考力、レポート・論文などの文章作法、プレゼンテーションなどの口頭発表の方法を少人数による演習で習得する。また、グループ発表やディスカッションなどのグループ学習により、社会人の基礎的能力であるコミュニケーション能力を向上させる。		
	情報基礎（一）	当科目は、情報通信技術を活用した情報処理に必要な基礎的知識及び技能の修得を目標とする。講義科目であるが、パソコンを用いた授業形態とすることで、学生の理解を深めさせる。インターネットから正確かつ適切な情報を収集する検索技法及び情報リテラシ、情報の発信・共有・二次利用及びコミュニケーションにおける情報倫理、データの加工・分析並びに文書の出版及び口頭発表にソフトウェアを利用する技法、情報機器とコンピュータネットワークの仕組みを知り、適正に手段や機器を選択するための知識を学ぶ内容とする。		
	情報基礎（二）	当科目は、情報基礎（一）で修得した情報通信技術を活用した情報処理に求められる知識の深化及び技能の発展を目標とする。講義科目であるが、パソコンを用いた授業形態とすることで学生の理解を深めさせる。インターネットを通じた情報発信の標準であるHTML、データベースの基礎知識、スプレッドシートによるデータ処理の応用、画像やグラフィックス等の媒体による情報の表現・編集技法、様々な事例におけるソフトウェアの応用を学ぶ内容とする。		
	スポーツ関係科目	スポーツ・レクリエーション（一）	スポーツは、人類が生み出した貴重な文化であり、性別や年齢、障害の有無を超えて人々が体を動かすことの喜びや楽しさを分かち合い、感動を共有し、絆を深めることができる。さらには、生きる力を育むとともに、他者への思いやりや協同する精神、公正さや規律を尊ぶ人格を形成する。レクリエーションは、文字通り、re(再び)-creation(新しいことを創造すること)であり、仕事や勉強などの重要な事項をより促進・強化するために必要な活動であることを意味している。心身の健康の維持や体力の維持・向上にも必要であることは言及するまでもない。 この授業では、さまざまなスポーツ・レクリエーションの種目を通じて、これらを体得することを目標とする。前学期は、ニュー・スポーツを含む多様な種目を学習する。	
	スポーツ・レクリエーション（二）	スポーツは、人類が生み出した貴重な文化であり、性別や年齢、障害の有無を超えて人々が体を動かすことの喜びや楽しさを分かち合い、感動を共有し、絆を深めることができる。さらには、生きる力を育むとともに、他者への思いやりや協同する精神、公正さや規律を尊ぶ人格を形成する。レクリエーションは、文字通り、re(再び)-creation(新しいことを創造すること)であり、仕事や勉強などの重要な事項をより促進・強化するために必要な活動であることを意味している。心身の健康の維持や体力の維持・向上にも必要であることは言及するまでもない。 この授業では、さまざまなスポーツ・レクリエーションの種目を通じて、これらを体得することを目標とする。後学期は、主にサッカー（フットサル）、バスケットボール、バレーボールを学習する。		
	課題別科目	特別講義（一）	本講義では国際社会で活躍する人材育成を目的に、海外活動の現場で惹起する問題への実践的な対応力の向上に必要な実践的な技能、知識を教授し、併せて海外体験の奨励を図る。講師には、国際機関、ODA、NGO、NPO、民間企業など様々な分野で活躍する経験者、有職者、本学卒業生等を招き、実践活動及び、そこでの苦勞・苦心・喜怒哀楽など体験談など最新の情報を提供するものである。なお、本講義では海外活動への参画を希望する学生へ、そのチャンスと試験などアプローチの方法についても紹介する。	
	特別講義（二）	本講義は、バイオテクノロジーが生活環境を多面的に支える現状を基礎から応用まで理解することにより、快適な生活環境作りの基礎知識を得ることを目的とする。 現在、バイオテクノロジーは各種微生物の応用技術、植物育種、環境エネルギー改善の基礎技術として発展しており、私たちの生活基盤を根本から支えている。多様なバイオテクノロジーを構成する各項目に関する基礎知識を平易に解説し、教員が関与する専門分野にも言及する。 授業は講義形式で行い、必要に応じた資料の配布と、パワーポイント、黒板書きと併用して行う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特別講義 (三)	<p>本講義は、本学が山梨県小菅村を中心に進めている「多摩川源流大学プロジェクト」の授業で、座学と体験実習からなっている。「座学」では地域づくりを視点に学外の専門家を講師に迎え、自然、環境、文化等様々な源流学の視点から源流域の特徴を講義し、源流域が現在抱えている問題や課題について学ぶ。また、「体験実習」では多摩川の源流に位置する山梨県小菅村の農林家における土づくりや土地管理、野菜づくりを中心とした農業体験、森林の間伐や木工製品の製作を中心とした林業体験、郷土食づくりや伝統工芸について学ぶ文化体験など、様々な源流体験を実施する。なお、年度によっては自分たちで栽培育成した農産物を販売することや販路のリサーチも予定する。所属学科では体験できない実習に参加するとともに、農林業機械の安全講習やチェーンソー等の資格取得実習も行う。</p>	講義：24時間 実習：24時間
	特別講義 (四)	<p>本講義は、バイオテクノロジーが食生活を多面的に支える現状を基礎から応用まで理解することにより、健康な食生活への基礎知識を得ることを目的とする。</p> <p>現在、バイオテクノロジーは、快適な食生活維持の基礎技術となっている。本講義では基礎技術の中心となっている食品分析、食材改良技術、生体内反応解析、安全性解析の各事項に関する基礎を平易に解説し、教員が関与する専門分野にも言及する。</p> <p>授業は講義形式で行い、必要に応じた資料の配布と、パワーポイントと黒板書きを併用する。</p>	
	インターナショナル・スタディーズ (一)	<p>自分と外国人、自国と外国の存在を歴史的及び社会的に認識し、世界の食農環境問題に対する理解を深化させ、さらに自身の所属学科の専門領域を活用することにより、世界人として活躍できる人材としての知識・技能・態度の習得を目的とした科目である。</p> <p>本学で実施している多種多様な国際協力活動の事例や、海外協定校のある国を中心に各国（及び地域）の食農環境に関する問題点と可能性を理解し、比較や類別により、各国との協調のあり方を探求する。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者：25 坂田 洋一) (18 稲泉 博己 /1回)</p> <p>本学における国際教育活動の事例として、海外協定校との合同開催による「世界学生サミット」及び本学の「国際教育プログラム (CIEP)」の実施内容を理解することにより、国際交流の重要性について具体的に述べるができるようになる。</p> <p>(25 坂田 洋一 /4回)</p> <p>世界の国々、世界の人々と国々及び多様な文化と農業について、NP0について、海外青年協力隊について、本学における国際交流について、在学中に参加可能なIS(インターナショナルスタディーズ) プログラムについて、理解する。また、今後の国際関係について予測し、国際人として必要とされる「心構え (= 各国との協調のあり方)」について推論する。</p> <p>(27 佐藤 孝吉 /1回)</p> <p>各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「南米の食農環境と海外協定校について」</p> <p>(28 島田 沢彦 /1回)</p> <p>世界の環境問題に関する知識と現地フィールドワークを行うために必要な技能を習得する。</p> <p>(29 志和地 弘信 /1回)</p> <p>海外協定校との学生交流プログラム参加者による経験談から、異文化理解の重要性を理解し、さらに異文化コミュニケーションの方法論について習得し、実践できるようにする。</p> <p>(31 鈴木 伸治 /1回)</p> <p>各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「イギリスの食農環境と農学研究について」</p> <p>(32 太治 輝昭 /1回)</p> <p>研究者の海外 (ドイツ) 留学事例を理解することにより、進路として研究職を選択した場合の自分を想像することができるようになる。</p> <p>(38 三原 真智人 /1回)</p> <p>各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「タイ及びカンボジアの食農環境と海外協定校について」</p> <p>(39 村松 良樹 /1回)</p> <p>各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「アメリカの食農環境と海外協定校について」</p> <p>(40 五條 満義 /1回)</p> <p>各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「中国及びモンゴルの食農環境と海外協定校について」</p> <p>(47 宮浦 理恵 /1回)</p> <p>各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「インドネシア及びマレーシアの食農環境と海外協定校について」</p> <p>(67 夏秋 啓子 /1回)</p> <p>海外における健康管理や危機管理の方法について、具体的な事例を知ることにより、自ら実行できるようになる。</p>	オムニバス方式
	インターナショナル・スタディーズ (二)	<p>本学が実施する短期海外派遣プログラムに参加し、本学姉妹校を実際に訪問して当該国の食農環境問題の理解を深化させるとともに国際人としての素養を磨く。夏休み中の2週間 (カナダのみ3週間) あるいは春休み中の4週間のプログラムとして集中実施する。</p>	集中

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	就職準備科目	キャリアデザイン	この科目は、① 実践的自己探求講座を中心に、“自分作り”から積極的な就職活動への足がかりをつくる。② 自分がまわりにどう見られているか、まわりの目からの自分を考える。③ 自己理解が深まり、自己概念を確立し、自信を持ち、主体的・積極的な行動のできる自分を形成する。④ 自分作りから“自分を磨く”ことへ、ビジネスマナー講座と同時受講することで、社会や人とのかかわり方、コミュニケーション術に一層のレベルアップをはかり、社会人としての人格形成へと導く。 以上、就職準備のためのスタンスとスキルを学び、大学生活での実践・訓練から就職活動への取り組みを促進する。	集中	
		ビジネスマナー	この科目は、① 自分作りから“自分を磨く”ことへ、ビジネスマナーから社会や人とのかかわり方、コミュニケーション術を学び、社会人としての人格形成へと導く。② 挨拶、立ち居振る舞い、言葉の使い方から、他人に自分の見せ方（魅せ方）を学ぶ。③ 女子学生へのメイク講座は、個別指導を中心に、より実践的に実施する。 以上、就職準備のためのスタンスとスキルを学び、大学生活での実践・訓練から就職活動への取り組みを促進する。		
		インターンシップ	本学の建学の精神は「人物を畑に還す」である。本学は、社会で活躍する優秀な人材を育成し社会に送り出すことを教育目標にしている。インターンシップは、学生の将来のキャリア・プランに関連して、大学在学中に一定期間を企業などで就業体験することによって、仕事の本質を理解し、更なるキャリア・プランの構築を図る制度である。このインターンシップは、学生が所属する学科や専攻に関わりなく、あらゆる職業に対して、窓口を開いている。個人の職業選択の自由は憲法で保障されており、キャリア・プランは学生自身がその意思で作りに出していくものである。従って、学生自身が実際の職場において就業体験を積むことにより、自分の適性を認識し、職業観を深め、職業選択に役立てることを目標とする。	集中	
学部共通科目	リメディアル教育科目	基礎生物	生物学は生命を科学的に追究する学問である。生物学を学ぶことは、生物である我々自身を知ることであり、また、我々が生きるために必要としている多くの動植物の生きる姿を理解することでもある。大学の専門分野において発展的な生物学を学ぶために、この講義で生物学の基本的事項を確実に理解する。		
		基礎化学	化学的な基礎知識が必要な専門科目を学ぶために、化学の基礎・基本的な事項を簡潔にまとめて講義する。毎回、講義を聴いたあと演習問題を解き、各自が講義内容が理解できたかどうかを確認する。専門科目の受講に必要な基礎・基本的な化学の項目について習得することを目的とする。		
		基礎数学	数学を学ぶことによって培われる数的感覚や論理的思考能力は、あらゆる学問の下地となるものである。初歩的な数式の扱い方から関数の基礎までを題材に数学の基礎・基本を学び直すと共に、こうした力を養う。また、苦手な学生の多い指数・対数関数における負の数や乗数の扱い、加法定理における変数の扱いに加えて、有効数字・N進法などの高校までに触れないことが多い大切な項目についても学習する。		
		文章表現	調べたものを論理的に展開する方法を実際に課題を書いて修得する。自分でテーマを決める。その周辺情報を調べる。結論を考える。論点を整理する。箇条書きにしてみる。まとまった字数で文章にしてみる。こういう手順で一歩一歩前に進むことにより、自分で思った以上に内容あるレポートが書けた学生が例年多数でいる。このプロセスを丁寧に辿り「自分で考える」ことの体験をしていくのがこの授業の趣旨である。		
外国語科目	全学共通科目	基盤英語科目	英語（一）	この科目では、＜聞く＞、＜話す＞、＜読む＞、＜書く＞という英語の4つのスキルの中で、＜聞く＞力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。学生に生の英語を聞かせる事に重点をおくが、それに対する学生のリアクションを測定し、その能力を向上させるため、単語テストなどで語彙の強化、確認を図りながら、ディクテーションなどの教材を用いて、能力の向上をめざす。1年生必修の科目であるので、教科書の内容はなるべく広範なものとするが、主に比較文化的な内容を中心とする。なお、クラスは習熟度別とする。	
			英語（二）	この科目では、＜聞く＞、＜話す＞、＜読む＞、＜書く＞という英語の4つのスキルの中で、＜話す＞力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。グループワークなどの教授法を用いて、学生に一言でも多く英語を発話させるよう指導する。その際、文法力や発音よりは論理性、流暢さに重点をおく。同時に単語テストなどで基礎的語彙の強化も図る。必修科目であるので、教科書の内容はなるべく広範なものとするが、主に比較文化的な内容を中心とする。クラスは習熟度別とし、必要、希望に応じて外国人教員担当のクラスも準備する。	
			英語（三）	この科目では、＜聞く＞、＜話す＞、＜読む＞、＜書く＞という英語の4つのスキルの中で、＜読む＞力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。教育手法としてはなるべく日本語を用いない直接理解を指導する。この科目の1番のポイントは、辞書の適切な使用法の指導で、電子辞書、冊子体、などの様々な形の辞書を適切に使える事を目標とする。また、単語テストなどで語彙の強化も図る。必修の科目であるので、教科書の内容はなるべく広範なものとするが、主に科学・環境に関する内容を中心とする。なお、クラスは習熟度別とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		英語（四）	この科目では、＜聞く＞、＜話す＞、＜読む＞、＜書く＞という英語の4つのスキルの中で、＜書く＞力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。ターム中に何度か自由作文の提出を求め、自分が言いたい事を表現できる英語能力の涵養をめざす。基礎クラスは英文パターンに習熟させる事を中心に展開するが、応用クラスでは文法力よりは論理性を中心に指導していく。必修科目であるので、作文テーマは広範な物とするが、主に科学・環境的な内容とする。クラスは習熟度別とし、必要、希望に応じて外国人教員担当のクラスも準備する。	
学部共通科目	実用英語科目	英語リーディング（一）	英語の文章を読む上で目的に応じて様々な読み方があることを理解し、効率的な読解を実践するために英文のパラグラフ構造を把握できるようにすることをめざす。和文英訳に頼る精読だけでなく、スキミング（文章の要旨を掴む）、スキヤニング（必要な情報を探す）のスキルを駆使し速読にも慣れ、語彙も増強しながら、英語を読むスピードを上げてより語数の多い文章も抵抗なく読めるようになることを念頭に置く。将来的に専門的な文章の読解やTOEICにも対応できることをめざす。なお、クラスは習熟度別とする。	
		英語リーディング（二）	「英語リーディング（一）」に引き続き、英語を読むスピードを上げてより語数の多い文章も抵抗なく読めるようになることをめざす。また、関連する話題を扱ったインターネットの記事やコンテンツにも触れることで、オーセンティックな素材の理解度を高めるだけでなく、与えられた話題に関する情報をまとめたり、それに対して自分の考えを発信する機会を得る。こうした4技能を活用した活動を通し、幅広い語彙知識やネイティブスピードを理解できる英語力を身につける。なお、クラスは習熟度別とする。	
		英会話（一）	コミュニケーションの手段としての英語を身につけるステップとして、基礎的な英会話力を養成する。基礎的な文法知識だけではなく、聞き手に応じた英語表現の違いを学び、ネイティブ・スピーカーの指導により流暢さや発音を強化する。日本語を全く介在させない授業を通し、主にスピーキングとリスニングのスキルを向上させ、コミュニケーションにおける即答力を身につける。本授業は、少人数制（20名前後）の形態とし、クラスは習熟度別とする。	
		英会話（二）	英会話（一）に引き続き、コミュニケーションの手段としての英語を身につけるステップとして、基礎的な英会話力を養成する。基礎的な文法知識だけではなく、聞き手に応じた英語表現の違いを学び、ネイティブ・スピーカーの指導により流暢さや発音を強化する。日本語を全く介在させない授業を通し、主にスピーキングとリスニングのスキルを向上させ、コミュニケーションにおける即答力を身につける。本授業は、少人数制（20名前後）の形態とし、クラスは習熟度別とする。	
		TOEIC英語（一）	本授業では、TOEICの試験対策を通し、総合的な英語のコミュニケーション能力に必要な知識とスキルを身につけることをねらいとする。授業を通し、効果の高い学習法を学び、自己学習でも応用できるようになることをめざす。文法や語彙力やリスニング力をつけるだけではなく、単語を文脈の中でとらえ適切な用法の知識を身につけることで、英語を英語の語順で理解し、日本語発想から脱却することをめざす。クラスは習熟度別とする。	
		TOEIC英語（二）	「TOEIC英語（一）」に引き続き、TOEICの試験対策を通し、総合的な英語のコミュニケーション能力に必要な知識とスキルを身につけることをねらいとする。さらにTOEICの各セクション（リーディング及びリスニング）や7つのパートの問題傾向や難易度も把握し、より効果的に得点できるようスキルを学ぶ。また、履修者が自ら自分の習熟度に合った学習計画を立て、具体的に自己学習を進めていくことができるよう効果的な自律学習の実現を促す。なお、クラスは習熟度別とする。	
		英語プレゼンテーション（一）	就職後や大学院進学後など将来自分の業務や研究内容を発表できるよう、より実践的な高度なプレゼンテーション能力の習得をめざす。まずは、自分の発信したい情報を論理的にまとめることを学ぶ。第三者の情報を引用する際に必要なパラフレーズ（書き換え）や大意要約の練習を行い、Plagiarism（盗用・剽窃）の概念についても学ぶ。次に、効果的な視覚資料を作成し、発表における姿勢、声の調子、アイコンタクトなど発表スキルを強化する。本授業はTOEIC600以上を目安とする上級レベルの学習者を対象とした少人数制（10名前後）の形態とする。	
		英語プレゼンテーション（二）	「英語プレゼンテーション（一）」に引き続き、発表スキルだけではなく、積極的な聞き手としての態度も養成する。相手の発表を正確に理解し、話題に関して自分の意見や提案を表明できるようになる。発表者としての質疑応答の対応だけではなく、聞き手による意見を集約するチェアマンの役割も体験する。将来的に専門分野で英語を使って活躍できる能力の基盤となることを目標とする。本授業はTOEIC600以上を目安とする上級レベルの学習者を対象とした少人数制（10名前後）の形態とする。	
		科学英語（一）	本授業では、大学院進学や就職後の専門性の高い英語力の習得をめざす。専門性の高い自然科学英語を読解し、正確に理解するための訓練を行う。ある程度まとまった長い文章を正しく理解するために、文の構造を正確にとらえるだけではなく、英語特有の発想に基づく文法・構文及びパラグラフの構成を理解することをめざす。専門的な語彙やイディオムの増強をはかり、体系的な知識を培う。また、文章を日本語及び英語において論理的に大意要約する訓練も行う。「科学英語（一）」は、次年度に大学院受験を予定している3年生を主に対象とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	初修外国語科目	科学英語（二）	本授業では、大学院進学や就職後の専門性の高い英語力の習得をめざす。専門性の高い自然科学英語を読解し、正確に理解するための訓練を行う。ある程度まとまった長い文章を正しく理解するために、文の構造を正確にとらえるだけではなく、英語特有の発想に基づく文法・構文及びパラグラフの構成を理解することをめざす。専門的な語彙やイディオムの増強をはかり、体系的な知識を培う。また、文章を日本語及び英語において論理的に大意要約する訓練も行う。「科学英語（二）」は、大学院受験を目前に控えた4年生を主に対象とする。		
		中国語（一）	本講義は初心者向けの入門レベルで開講する。中国語にとって非常に重要な発音と四声を重点に授業を進める。目・口・耳を使い、基本的な表現を繰り返し練習することによって発音と四声を定着させ、さらに簡単な文型を生かして表現したいことが表現できるように指導する。		
		中国語（二）	中国語（一）に引き続き、発音・四声の定着と聴解力・会話力の向上をめざして、授業を進める。文法は中国語（一）よりやや複雑になることから、ポイントをしっかりとおさえながら簡単な自由会話ができるように指導する。		
		スペイン語（一）	コミュニケーションの手段としてのスペイン語を身につけるステップとして、基本的なスペイン語会話を養成する。様々な状況設定で、場面や聞き手に応じた表現、発音、文法を学ぶ。学習をきっかけに、異文化を理解する大切さや楽しさを認識する。		
		スペイン語（二）	スペイン語（一）に引き続き、コミュニケーションの手段としてのスペイン語を身につけるステップとして、基本的なスペイン語会話を養成する。様々な状況設定で、場面や聞き手に応じた表現、発音、文法を学ぶ。学習をきっかけに、異文化を理解する大切さや楽しさを認識する。		
専門教育科目	学科基礎科目	人間関係科目	科学と哲学	インドの神話からニュートン力学の成立にいたるまでの思想の流れを概観する。神話も科学も精神に固有の「作りだし能力」に起源をもつことにおいて、互いに決して無縁ではない。神話から力学にいたるまでの多様な精神的所産に検討をくわえ評価をあたえ、それらのなかから普遍的で客観的な知識を引き出すことが哲学の一つの課題である。例えば幾何学的な「点」を分割されえない「単一性」として捉えることによって、円や多角形といった分割可能なものを点の展開と見なすことなどである。本講義は、人間が近代以前に確立された哲学的知識の基本的な諸概念と近代の科学的思考法との密接な連関についての理解を目的として構成される。	
			芸術	芸術という言葉は、もともとは「人を自由にする学問」であるリベラル・アーツの訳語として明治期に使われ始めました。技芸と学術から一語ずつとられている「芸術」は人間とは何か？という問いを出発点にして、全ての学問と繋がっていて非常に奥の深いものです。この授業では美術に焦点をあて、古代から現代のさまざまな作品に含まれる視点や問題意識に触れることで、人類が如何に新しい時代を作ってきたかを知り、名品を見分ける目を養います。また若干手を使う時間を設けます。その双方から創造的な能力を開拓する手がかりを発見してください。	
			生命倫理	医療技術の進歩にともなって、生命の人工的な維持、臓器移植、人工あるいは体外授精などが現実的になされる時代が到来した。さらには遺伝子に対する知識とそれに変容をくわえる技術が開発され、いまや生命そのものすらが人間の手によって作りだされ、改変されるものとなっている。しかし、こうした技術と知識の発展が世界に真の幸福をもたらすかといふことについてはかならずしも肯定的な見解ばかりとは言えない。植物、動物を問わず、科学技術の生物への適用の是非という問題、そしてそれを評価し判定するための基準となるべき倫理をかんがえることが求められている。講義を通じて、そのために必要となる基本的な概念、例えば生命、健康、意識などへの理解を深めることをめざす。	
			文化人類学	人間とは何か。文化とは何か。社会とは何か。文化人類学は、地球上に生きる様々な「他者」を、文化と社会をキーワードに理解することをめざす学問である。その最大の特徴は、フィールドワーク（参与観察）という手法に基づきながら、異なる文化や社会について経験的かつ実証的に考え、民族誌（エスノグラフィー）を書くことにある。この作業は同時に、私たちが生きる社会の支配的な価値観を相対化することだけでなく、人間の普遍性を考えることを意味する。本講義では、全15回の講義を通して、人間の多様性と普遍性の双方を視野に入れる文化人類学的な「もの見方」を身につけることをめざす。	
			社会関係科目	経済入門	日常生活をする上で最も身近で重要な「経済」とは何かについて考える。「経済」を考える前提として、「経済」の歴史、理論を大まかにつかみ、日本国内や世界各国・各地域で起こっている経済活動に関わる状況について理解できるようにする。
国際関係を考える	グローバル化が急速に進展する今日、国際社会（日本を含めた世界全体）、紛争やテロ、貧困、食料危機、資源の争奪戦、環境破壊など、様々な問題に直面している。そこで本講義は、国際社会に見られる諸問題について具体例や映像資料を用いて説明した上で、これら諸問題に対する理解を深める。 また、本講義では、様々なトピックに対する理解・関心をより深めてもらいたいため、授業担当者による一方的な説明だけではなく、授業担当者を受講生の双方向（及び受講生同士）の議論を中心に授業を進め、①グローバル化が生み出した政治経済的な問題に関心（問題意識）を抱き、受講生自身の視野（考える力）を広げること、②国際社会、特に開発途上国（アフリカやアジア、ラテンアメリカ）が抱える貧困や飢餓、内紛等の諸問題について考察し、理解を深めること、の2点をめざす。				

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
自然関係科目		日本国憲法	憲法は、その国の構造と理念について規定し、様々な法規の頂点に位置する最高規範である。現に私達は、憲法の定める理念のネットワークの中に生きていると過言ではなく、憲法に関する知識は、社会における市民の基礎的素養としても要求され、それゆえ常識の尺度としても問われることがある。本講義では、その日本国憲法に関する基本的な体系構造を理解するとともに、憲法が関わる現代的な諸問題の考察を通じて、「憲法的な」ものの捉え方について学習することを目的とする。	
		現代社会の諸問題	現代社会では、「絆」や「繋がり」といった言葉が強調される反面、さまざまな生きづらさの中を生きざるを得なくなっている。しかしながら、それらに対して精神論や技術論で解決が可能であるかのような言説が流通し、社会的なものであるはずのものが個人の問題に帰されてしまっている。その結果、「語られていること」とは逆に、社会的な連帯と繋がりが失われ、相互不審と不信という現代的苦しみを生きざるを得なくなっている。 本講義では、以上のような視点から、現代社会を社会科学の視点から捉え、生きづらさ＝苦しみを解消するための社会的方法を考えていきたい。	
		生物学	農学部で学ぶ上で基礎となる科目の一つに生物学がある。生物学とは命ある物に共通する点、異なる点を明らかにすることの追究により進展してきた学問である。追究の過程では生命現象の詳細が明らかとなり、技術の進歩によりこれら現象に人類の意図を組み込むことも可能となっており、医学や農学の進歩を支える基盤となっている。本講義では、専修科目の理解に役立てるべく生物学の基礎的内容を講義する。	
		化学	農学部で学ぶ上で基礎となる科目の一つに化学がある。化学とは生命現象として起こっている物質の反応自体であり、その反応は生体内で起こっているものと生体外で起こっているものがある。この物質反応を操作する上で、物質の性質を知ることが重要となり、さらにこの基礎的な知識は医学、農学の進歩を支えている。本講義では、専修科目の理解に役立てるべく化学の基礎的内容を講義する。	
		数学	農学を学ぶ者にとって基礎的数学の知識は不可欠であり、中でも行列の理論(線形代数)と微積分学は重要である。 本講義の前半では、行列の概念と演算及びそれらの性質について理解し、行列の対角化とその応用ができるようになることを目標とする。後半では、極限の概念と1変数関数の微分法・積分法について理解し、それらの応用ができるようになることを目標とする。 また、講義全体を通して具体的な問題の解法に重点を置く。	
		物理学	現在の科学技術は物理学を基礎として成り立っているといつてよい。その意味でガリレイから始まる近代物理学の考え方は現代に生きるすべての人が知っておくべき教養の1つである。本講義では最小限の数学的知識で、物理学が対象をどのように捉え、解釈してきたかに重点を置く。前半は力学的世界観の形成、後半は現象論的な熱力学の形成に焦点をあてて解説する。 教材は配布資料を使用するほか、板書やスライド、WEBサイトを利用する。数学的知識は高校数学の数I、三角関数、ベクトルを仮定して講義するが、ベクトルや微分について知っていることが望ましい。必要に応じて数学的概念については講義中で簡単に解説をする。	
地学	地球科学の分野は非常に多岐にわたり、日常生活や災害から身を守るために必要となる基本的な知識も多く含んでいる。一方で間違った認識や曖昧な知識も一部に流布している。本講では最新の観測技術や調査・研究で得られた成果を紹介しつつ、地球で起こる諸現象を正しく理解するために、その関連性に重点を置きながら、固体地球の特性と形成の歴史を中心にいくつかのトピックスを解説する。そして、水と生命の惑星・地球での暮らし方とより良いつきあい方を考え、①地球現象に関する現代の基本的な知識と思考方法を身につけている、②地球現象と自然災害に関する現代の基本的な知識と思考方法を身につける、③現代の地球科学の基礎知識に基づいて自らの日々の行動について考察できることをめざす。			
学科専門科目	専門共通科目	農学原論	(概要) 人類は20世紀において大量生産・大量消費・大量廃棄の生活を実現したが、それに伴って多くの問題も発生した。すなわち、人口増加を背景に、食料、環境、資源・エネルギー問題という複雑に絡み合ったトリレンマに対応しなければならなくなった。この問題を解決するためには、従来の1次産業対応型の農学だけでは不十分であり、新しい農学が必要である。すなわち「農学2.0」を確立することができて初めて持続的な社会を構築し、人類の幸福(well-being)を実現することができる。そこで、この授業では、農業を農業生態系の重要なサービスとしてとらえ、その量と質を改善するという観点から、いくつかの重要なテーマについて学習することを通じて、「農学2.0」にふさわしい視点と、問題解決のためのデザイン力を養成する。 (オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 21 小川 博) (1 長島 孝行/4回) 様々な生物や生物素材の構造や機能性等の概要、更にはそこから応用された様々な分野にまたがる製品や地域創生などについて具体的に解説していく。 (5 森田 茂紀/4回) 現在、人類が直面している人口、食料、環境、資源エネルギーなどの問題を解決し、持続的な社会と人類の幸福を実現するために農業を中心としながら、社会や地域のデザインを行う必要があること、そのための試みを紹介し、広い意味での農学に係る範囲を俯瞰する能力を習得することを目指す。 (21 小川 博/4回) 本学における実学としての農学のあり方、畜産物生産・使役動物としての動物生産の発達の歴史と、動物生命科学の発達、人の生活の質の向上への動物の活用などの新たな動物科学の展開について解説する。 (33 馬場 正/3回) 農業を支える応用科学、総合科学である農学は、対象や手法の異なる多くの分野からなる。そのなかで根幹をなす生産農学の立場から、農学、農業の現状の問い直しを行う。その講義を通じて、それぞれが未来の農学、農業のあるべき姿を構想することを目的とする。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	農業実習（一）	<p>（概要） 農業実習（一）では、富士農場・伊勢原農場・棚沢圃場・キャンパス内の施設（加工・栽培管理）及び学外の農業関連施設を活用して、農業で対象とする動物・家畜、植物・作物だけでなく、それを取り巻く環境を含めて実物を観察する。また、動物の飼育や植物の栽培に関する基本的な管理作業、さらに生産物の加工作業を体験することを通じて「農のこころ」を育み、同時並行的に教授している専門教育の準備科目の講義と連携させることで、相互補完的に農学に関する基礎的な理解を深めることを目標とする。</p> <p>実施方法については、学生は3班で編成し、それぞれの分野において5回ずつ実施する。</p> <p>（オムニバス方式・共同（一部）／全15回） （単位認定者：1 長島 孝行） 【植物関係】 （1 長島 孝行、5 森田 茂紀、9 藤岡 真実、12 風見 真千子、14 御手洗 洋蔵／15回）（5回×3班） 伊勢原農場ならびに棚沢圃場、キャンパス内の圃場において、作物の種類と特徴、圃場管理、栽培と維持管理等、植物に関する幅広い知識を修得させる。</p> <p>【動物関係】 （2 多田 耕太郎、4 土田 あさみ、6 川嶋 舟、15 森元 真理／15回）（5回×3班） 富士農場とキャンパス内の圃場とその周辺環境において、動物の飼育管理法を学習させる。また、学外の施設を利用した実習も取り入れ、動物に関する幅広い知識を修得させる。</p> <p>【加工・流通関係】 （3 谷口 亜樹子、7 櫻井 健志、8 野口 治子、10 松田 浩敬、11 入澤 友啓／15回）（5回×3班） 学内施設で農畜産物の加工実習を行い、加工に関する基礎的な事項を習得させる。農業関係の流通の実態を理解させるため学外の施設見学を行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
	基礎演習	<p>高等学校の受動的な学習態度から、能動的で自律的・主体的な学習方法を習得することを目的とした科目である。大学で学ぶための必要な技法として、情報の収集・整理（文献・情報検索、フィールドワーク・調査・実験）の方法、読解・文献講読の方法、問題発見・解決に必要な思考力、レポート・論文などの文章作法、プレゼンテーションなどの口頭発表の方法を、少人数による演習で習得する。また、グループ発表やディスカッションなどのグループ学習により、社会人の基礎的能力であるコミュニケーション能力を向上させる。</p>	
	農業実習（二）	<p>（概要） 農業実習（二）では、体験重点型の農業実習（一）の展開として、農業で対象とする動植物・その生産物・加工物や、背景となる自然環境に関する理解をさらに深めるために、測定・評価に関する基礎的な手法を含めて学ぶ。また、測定・評価の記録の重要性と、それを利用したテーマごとにレポートの作成を通じて専門教育を進める準備を整えることを目標とする。同時に、学外の施設の活用などを含めて、農学と社会とのつながりを体験し、専門教育の社会還元の基本となる「農のこころ」を育む。</p> <p>実施方法については、学生は3班で編成し、それぞれの分野において5回ずつ実施する。</p> <p>（オムニバス方式・共同（一部）／全15回） （単位認定者：1 長島 孝行） 【植物関係】 （1 長島 孝行、5 森田 茂紀、9 藤岡 真実、12 風見 真千子、14 御手洗 洋蔵／15回）（5回×3班） 伊勢原農場ならびに棚沢圃場、キャンパス内の圃場において、作物の生育状態の評価、栽培管理、収穫、生産物の処理等について学習させる。また、植物園実習も取り入れ、植物に関する幅広い知識を修得させる。</p> <p>【動物関係】 （2 多田 耕太郎、4 土田 あさみ、6 川嶋 舟、15 森元 真理／15回）（5回×3班） 富士農場とキャンパス内の圃場とその周辺環境において、動物の飼育管理法や生産物の管理、評価等について学習させ、動物に関する幅広い知識を修得させる。</p> <p>【加工・流通関係】 （3 谷口 亜樹子、7 櫻井 健志、8 野口 治子、10 松田 浩敬、11 入澤 友啓／15回）（5回×3班） 学内施設で農畜産物の加工実習を行い、加工に関する様々な事例を学習させる。農業関係の流通の実態を理解させるため、農業実習（二）においても学外の施設見学を行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
	心理学概論	<p>心理学は「こころ」という目に見えない構成概念を扱う学問である。本講義では、学習・認知・知覚・発達・社会の領域における心理学の諸理論に関して広く学ぶ。先達の心理学者たちが知識やひとの成長をどのように捉えたのか、そして現代においてどのように応用できるのか、日常の体験と関連付けながら考える。また、心理学の知見が如何なる手段によって確かめられたものであるかという、根拠に注意を払えるようになることをめざす。</p>	
	生化学	<p>我々の体は細胞から構成されている。細胞は化学物質から形成されている。1つ1つの細胞は、食事として消化・吸収した栄養素を利用して、生きていくために酵素反応や代謝などの様々な生命活動を営んでいる。細胞が多数集合して臓器が形成され、様々な臓器が情報伝達によってうまく連携することで、健康な体が保たれている。その酵素反応、代謝や情報伝達などの生命現象は化学反応である。生体内で起こっている生命現象を、化学の側面から研究したものが生化学である。生化学の講義は、生体における栄養素の消化・吸収、酵素反応と代謝、情報伝達のしくみ、について化学的に理解することを目的とする。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		環境科学	全体を、「物理量の関係」、「気候と農業」、「地球温暖化の影響」の3つのパートに分け、最終的に農業と環境の関わりについて理解を深める。「物理量の関係」では、地球に到達した太陽エネルギーが作物の乾物生産に利用されるプロセスを通し、どのような物理的關係が成り立っているかを学ぶ。「気候と農業」では、農業が立地する条件として気候資源の概念が重要であることを、事例を参考にしながら理解する。「地球温暖化の影響」では、環境問題のなかで最も重要な事象の一つとして地球温暖化を取り上げ、温暖化予測及び影響評価の実態と最新の研究成果について学ぶ。	
		知的財産論	知的財産の最前線にいる現役の国際特許事務所の弁理士が、知的財産をめぐる最新の話題・事例を盛り込みながら知的財産を分かりやすく解説し、知的財産の必要性・重要性を理解する。本講義は、近年企業の知的財産部で注目されている知的財産管理技能士（国家資格）の試験対策にもなる。	
		動植物園論	植物園論では植物園の歴史や運営、管理（植栽植物の栽培など）、標本の作成と保存、社会のニーズに対応した取り組みや社会貢献などについて学習する。 動物園論では、動物園の歴史、動物の飼育、繁殖、展示、域外保全等について講義し、時代とともに変化してきた役割と将来のあるべき方向について学習する。 植物園と動物園について学ぶことにより、それらの使命と社会に対する貢献を理解することを目的とする。	
創生型科目	農業インターンシップ（一）	農学部におけるこれまでの特色ある農業教育をさらに発展させ、「実践的農業技術と問題解決能力、高いコミュニケーション能力を有する自律型就農者の育成」を目的とする。具体的には、①就農支援講座、②国内および海外における農業生産現場、または農業関連の企業などでの農業研修・実習、③学外農業研修・実習の事前・事後研修により構成し、学外での一定期間の農業体験を通じて、自律型就農者の育成と就農支援だけでなく、農業生産や農業関連産業への関心を高める。また、食の安全や農業技術に関する知識習得、環境に対する配慮の方法などについても事前事後の講義・研修で行う。		
	農業インターンシップ（二）	農業インターンシップ（一）に引き続き、国内および海外の先進的な農業の取り組み事例を紹介し、国内および海外の農業生産現場、または農業関連の企業などでの一定期間の研修・実習を体験して、農業や食に関する問題意識の高揚や課題解決の糸口を見出す。また、農業インターンシップ（一）、（二）で習得した成果を交え、農業に関わる種々の現場から将来の農業のあり方についての理解や考察を深めるためにディスカッションやプレゼンテーションの機会を設けて、コミュニケーション能力を高め、地域の活性化や豊かな社会を構築する担い手としての資質を高めることを目的とする。		
専門基礎科目	デザイン農学概論	（概要） 農学は機構解明を行う認識科学であると同時に、その成果を社会に還元して役立てていくことにより大きな重点をおく設計科学であることを理解することを目的とする。食料問題・環境問題・資源エネルギー問題を解決して、持続的な社会を構築して、人類のwell-beingを実現するための各研究室の守備範囲としての課題やアプローチの方法について具体的な事例を紹介することを通して、デザイン農学の見方・考え方を俯瞰することを目標とする。 （オムニバス方式／全15回）（単位認定者：5 森田 茂紀） （1 長島 孝行／3回） これまでのものづくりを変える、システムを変える、地域を変える、人の心を変えることで、心豊かな持続性を確立するソーシャルデザインについて概説する。 （2 多田 耕太郎／3回） 食資源となる農畜産物の加工の基礎について概要を紹介するとともに、今日の食料供給と環境保全に配慮した食資源の加工利用デザインのあり方について考察する。 （3 谷口 亜樹子／3回） 豊かな食環境をデザインするうえで欠かせない、食の安全安心の維持について、また日本の食文化の移り変わりや栄養面への影響について概要を紹介する。 （4 土田 あさみ／3回） 生活スタイルの変遷の中で活用される生き物について概説し、現代生活の中でwell-beingを向上させるサステイナブルな生き物の利用について考察する。 （5 森田 茂紀／3回） 農学の目標としての持続的社会やwell-beingについての問題の設定と、農学的手段としてのデザインに関する見方・考え方について包括的な解説を行う。	オムニバス方式	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	バイオテクノロジー論	生物の持っている機能を暮らしに役立てる技術を生物機能開発（バイオテクノロジー）という。このような技術は、機能性食品、機能性化粧品、バイオ医薬品等の健康、医療分野を始め、モノづくり、環境、エネルギー分野など、衣食住の幅広い領域で開発利用され、持続性の確立に役立っている。この授業では、オールドバイオテクノロジーからニューバイオテクノロジーまで多岐にわたる生物機能開発に係る具体的事例を分かりやすく解説する。また、植物や動物などの生物機能開発の事例を基礎的なメカニズムから製品や最新の開発現状までわかりやすく製品などを示しながら説明していく。	
	サステナビリティ農学	人口問題を背景として、食料問題、環境問題、資源・エネルギー問題が相互に密接に関係していることを解説する。そのうえで、持続可能な消費としての食と持続可能な生産としての農のマッチングについて考察し、日本の食と農のあるべき姿のデザインについて考察する。また、エネルギー作物の栽培と利用で持続可能性（サステナビリティ）を確保し、人類の幸福を実現するために必要な、広い意味での農学的な取組みについて考察する。以上の授業を通して、持続可能な社会と人類の幸福を実現するため、農学分野からアプローチできる考え方を習得することを目指す。	
	畜産物利用論	<p>(概要) 畜産物利用学は畜産物を利用研究する学問分野である。本講では畜産物の代表格である乳、肉、卵について取り扱う。これらの生化学的な性質はもちろんのこと、製造学的、栄養学的な側面からも講義を展開していく。畜産物を利用した新たな製品開発に必要な知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 2 多田 耕太郎) (2 多田 耕太郎/5回) 畜産物利用の中でも乳の利用や加工原理などについて理解を深めるために、畜産物利用学概論(畜産食品の現状)、牛乳の化学成分(1)(カゼイン、ホエー)、牛乳の化学成分(2)(乳脂質)、乳製品(1)(アイス、バター、発酵乳)、乳製品(2)(チーズ、練乳、乳副産物)について学ぶ。 (11 入澤 友啓/5回) 畜産物利用の中でも卵の利用や加工原理について理解を深めるために、卵の構造と成分(鶏卵の構造と成分)、卵の加工特性(1)(熱凝固、ゲル化性、起泡性、乳化性)、卵加工品(鶏卵の加工特性を活かした食品)、動物性食品の機能性(1)(乳・肉・卵の機能性)、動物性食品の機能性(2)(乳・肉・卵の機能性)、について学ぶ。 (13 小泉 亮輔/5回) 畜産物利用の中でも肉の利用や加工原理について理解を深めるために、肉用家畜と食肉の生産(食肉用家畜の品種や特徴、解体)、筋肉の構造と構成成分(筋肉の構造とそれらを構成するタンパク質)、筋肉の死後変化と食肉への転換(食肉になるまでの筋肉の変化)、ソーセージ(ソーセージの製造方法や加工原理)、ハム・ベーコン(ソーセージの製造方法や加工原理)、について学ぶ。</p>	オムニバス方式
	農産物利用論	<p>(概要) 農産物利用学は農産物を利用研究する学問分野である。本講では主に穀物、野菜、果実について取り扱う。これらの生化学的な性質はもちろんのこと、製造学的、栄養学的な側面からも講義を展開していく。農産物を利用した新たな製品開発に必要な知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 3 谷口 亜樹子) (3 谷口 亜樹子/5回) 農産物利用の中でも穀類の利用や加工原理などについて理解を深めるために、農産物利用学概論(農産物利用学の概要)、穀類の加工1(穀類(米)の加工)、穀類の加工2(穀類(小麦)の加工)、穀類の加工3(穀類(その他)の加工)、豆類の加工、について学ぶ。 (8 野口 治子/5回) 農産物利用の中でも野菜などの利用や加工原理などについて理解を深めるために、果実の加工1、果実の加工2、果実の加工3、野菜の加工1、野菜の加工2、について学ぶ。 (12 風見 真千子/5回) 農産物利用の中でも果実やその他の農産物の加工原理などについて理解を深めるために、野菜の加工3、食用油脂、農産物の加工技術(農産物の加工に用いられる機器や技術)、について学び、最終回の総括でこれまでの講義内容を総合的に理解する。</p>	オムニバス方式

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	生活デザイン農学	<p>(概要) 社会の最小単位である個人の生活に焦点をあて、実際の生き物と直接接する機会が減少した現代生活において、いかに動植物が生活におけるwell-beingの向上に寄与しているかについて解説する。またその適正な活用が自身の健康、ひいてはサステナブルな社会の構築にも寄与することに繋がることを学ぶ。具体的には平素の暮らしにおける生き物の役割、活用の利点、そして活用する生き物自身の暮らしへの配慮の必要性についても解説する。また、このような機能性を積極的に活用した福祉や医療での役割などについても解説する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 4 土田 あさみ) (4 土田 あさみ/9回) ここでは生き物活用の目的の重要性、適切性、妥当性、活用する生き物の人に対する特性などについて解説し、活用する機会や手法、そしてその効果などに関する情報を例示していく。 (6 川嶋 舟/3回) 生活に関わる機会の多い種々の動物の特性や機能性について解説するだけでなく、ホースセラピーを例に、動物が医療、教育、福祉、レクリエーションなど多くの領域に複合的に関わっていることなどについて実例を交えて解説していく。 (9 藤岡 真実/3回) 本講義では、暮らしを支える植物、暮らしを彩る植物、共に暮らす植物、の3テーマに沿って、学生の参加型授業を展開する。多様化した現代社会では、生活時間・生活習慣・生活環境は個々に異なるので、一人一人の生活スタイルに合わせた植物選択はもちろんのこと、継続したいと思わせるモチベーションサポートが重要となる。学生が自分自身を事例として、実践的に学ぶことにより、園芸療法をはじめとする療法的支援に必要な基礎知識を習得する。</p>	オムニバス方式
	デザイン農学基礎実験実習・演習	<p>本科目は各分野、各研究室の守備範囲としての課題やアプローチの方法について具体的な事例を学ぶことを目的とし、イノベーション分野とサステイナビリティ分野それぞれが設定した基礎実験実習・演習を展開する。各分野および各専攻に関連した化学実験、生物学実験、社会調査や施設実習を基盤とした実験実習・演習を行うことで、デザイン農学の見方・考え方を俯瞰することができるようにする。</p>	共同 ※ 実習：60時間 演習：30時間
	食品化学	<p>(概要) 食品化学は食品の成分やそれらの変化について研究する学問である。本講では食品の成分として水分、炭水化物、脂質、タンパク質(アミノ酸)、無機質などの基礎的な知識はもちろんのこと、それらが製造、保存中にどのような変化が生じるかについて講義を展開し、食品加工に必要な知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 2 多田 耕太郎) (2 多田 耕太郎/5回) 食品に含まれる主要な成分とその性質：各種成分の基本的な性質を理解する。具体的には、食品化学概論(食品化学の概要)、水と水分活性(水の構造、性質、食品中での存在状態)、糖(単糖・オリゴ糖・多糖類の構造や加工特性)、でんぷん(でんぷんの構造やそれらに作用する酵素)、脂質(脂質の分類や脂肪酸など)、を網羅して解説する。 (11 入澤 友啓/5回) 卵、穀類などの各論：卵、米、小麦、大豆に関する基本的な性質を理解する。具体的には、卵の化学(卵の種類、成分、性質)、米の化学(米の種類、構造、成分、性質)、小麦の化学(小麦の種類、構造、成分、性質)、大豆の化学(大豆の種類、構造、成分、性質)、を網羅して解説し、講義全体の総括を行う。 (13 小泉 亮輔/5回) 食品に含まれる主要な成分とその性質肉、乳の各論：各種成分の基本的な性質を理解する肉、乳に関する基本的な性質を理解する。具体的には、アミノ酸(アミノ酸の種類、分類、性質など)、タンパク質(1)(植物性タンパク質)、タンパク質(2)(動物性タンパク質)、肉の化学(畜肉の種類、成分、性質)、乳の化学(乳の種類、成分、性質)、を網羅して解説する。</p>	オムニバス方式

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	デザイン農学栽培入門	<p>(概要) 植物を活用し地方あるいは都市のより良い生活環境をデザインするためには、植物に対する適切な知識や栽培技術が不可欠となる。本科目では、植物栽培の基本要素や、播種・育苗・土づくり・施肥・定植・整枝など一連の作業について座学で学び、得られた知識の定着と基礎的な技術習得のため、大学内の圃場・庭園にて植栽管理を実践する。これらを通じて多様な生活環境において植物を栽培するために必要な基礎的な知識および技術の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 14 御手洗 洋蔵) (5 森田 茂紀/4回) 植物栽培が、植物、環境、管理という3つの要素からなるという基礎的な考え方を解説する。そのうえで、地方あるいは都市のどのような緑空間に、どのような植物を配置するか、またその中に作物や資源作物を取り入れることの意義に配慮しながら、栽培のデザインについて考察する。 (9 藤岡 真実/5回) 毎年同じ時期に芽吹き、花を咲かせ、実をつける植物は、私たちに安心感をもたらす。また、季節感が薄れがちな現代人の季節感を養成し、文化的な生活を彩ることに寄与する。本講義では、癒しの空間や療法の場合に欠かせない「愛でる」「懐かしむ」植物を中心に、多年生の園芸作物(主に花卉)と花木の栽培について解説するとともに、大学内庭園において栽培管理を実践する。 (14 御手洗 洋蔵/6回) 市民農園や公園花壇など、地方あるいは都市の公共空間をデザインする際に多く用いられる一年生の園芸作物(野菜・花卉)に関して代表的な園芸作物を取り上げ、栽培過程の一連(播種・育苗・施肥・定植など)について基礎を解説するとともに、大学内の圃場において植栽管理を実践する。</p>	オムニバス方式
	デザイン農学専攻別実験実習・演習	<p>(概要) 本科目はデザイン農学科の学生が今後専門分野を学ぶにあたり、必要な基礎知識と基礎技術習得することを目的とし、生物機能開発学、食資源利用学、食機能科学、生活デザイン農学、社会デザイン農学の5つの研究室が担当する実験実習・演習である。</p> <p>(オムニバス方式・共同(一部) / (全15回) (単位認定者: 1 長島 孝行) <生物機能開発学研究室> (1 長島 孝行、7 櫻井 健志、15 森元 真理/8回) (2回×4班) 1. 生物の構造解析: 各種顕微鏡の特性と使用方法について解説し、実際にそれらを使用して生物の構造を解析する手法を学ぶ。 2. 生物機能を活用した製品作り実習: 生物機能を活かした製品の一例としてシルクを用いた化粧品作りを行う。シルクの多様な機能性(保湿度や紫外線遮断力の高さ等)を理解するとともに、他にどのような製品への応用が考えられるのかについて議論する。 <食資源利用学研究室> (2 多田 耕太郎、11 入澤 友啓、13 小泉 亮輔/8回) (2回×4班) 畜産物を用いて製造を行う。座学で学んだ食品に関する知識と食品衛生に関する知識を製造を通して体得し、食品開発に重要な知識と経験を得ることを目指す。 <食機能科学研究室> (3 谷口 亜樹子、8 野口 治子、12 風見 真千子/8回) (2回×4班) 調理を通して、座学で学んだ知識を体得する。また、実際に加工したものに對しての官能評価方法を体得することにより商品開発に役立てることを目指す。 <生活デザイン農学研究室> (4 土田 あさみ、6 川嶋 舟、9 藤岡 真実/8回) (2回×4班) 1. 植物介在活動: グループに分かれて植物介在プログラムを作成し、学生同士で模擬的活用を体験する。保育園から高齢者施設まであらゆる生活場面を想定して実践するための基礎知識と技術を習得する。 2. 介在動物管理: 人と安全にかかわるための動物管理について、キャンパス内の動物飼育舎(現 セラビーセンター)で実践的に学ぶ <社会デザイン農学研究室> (5 森田 茂紀、10 松田 浩敬、14 御手洗 洋蔵/8回) (2回×4班) 1. 多様な消費者ニーズをもつ野菜を例にとり、高品質や機能性に関するマーケティング調査を実践するための社会調査手法の基礎を学ぶ。 2. 野菜の高品質や機能性を様々な簡易的手法を用いて測定・分析し、得られた結果をもとにして消費者の嗜好との関連性を指し示すための基礎的手法を学ぶ。</p> <p>全体での解説等(共同/5回) (担当者・全員) 実験実習を行う前にガイダンスとして各分野、各研究室の守備範囲としての課題やアプローチの方法について具体的な事例および実践手法を解説する。各専攻基礎実験実習終了後には全体のとりまとめを行い、次年度から専攻する分野および研究室の理解を深めるために専攻ごとに研究室にて模擬演習を行う。</p>	オムニバス・共同(一部) ※ 実習: 60時間 演習: 30時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	実験計画法	<p>(概要) 農学部における研究は、研究対象が動植物である場合やそれらをツールとする場合、また、研究の場が実験室内の場合もあれば、いわゆるフィールドの場合もあり、実施する個々の研究によって必要な知識や情報、準備、手順などが多種多様にある。本科目では、基本的な研究に当たっての心構えから、収集したデータの取扱までの、基礎的な内容を取り扱う。具体的には、研究実施にあたり、研究倫理、実験動物の取扱、人を対象とした研究での倫理、外部機関との連携の場合の倫理等の基本的な内容ほか、実践的な内容として、フィールド調査の手法や実際にデータを取り扱うための生物統計学について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 11 入澤 友啓) (7 櫻井 健志/3回) 外部機関との連携に伴うルールについて具体的な社会調査や事例から実際に研究を進める際に必要となる視点を学ぶ。 (10 松田 浩敬/3回) 人々の意識やニーズを把握するための社会調査手法について学ぶ。主にアンケート調査について調査票の設計や実際の調査の流れ、さらには得られたデータの入力・集計法など、事例を通じて解説する。 (11 入澤 友啓/3回) 研究の計画と倫理 (実験データの取り扱い記録の方法など)について理解を深めるために、研究と倫理、実験データの取り扱いや保管の方法、研究の計画方法について学ぶ。 (12 風見 真千子/3回) 人を対象とする研究における倫理とルールについて学び、ルールにのっとった研究を進めることができるような知識を得ることを目指す。 (36 増田 宏司 /3回) 実験、調査によって得られたデータの客観性を確保する一手段として統計処理を施し、検定結果に基づき作図、作表し、それらを科学的に論述する手法を学ぶ。</p>	オムニバス方式
	社会デザイン農学	<p>(概要) 農業には主体である食料生産に付随して、景観形成、保健休養、教育などの様々な機能がある。これらは地方から都市部までの各地域社会の形成に大きく寄与するとともに人どうしの交流にも活用されてきた。本科目では各地域社会における生活環境の質的改善やコミュニティ醸成のため用いられる農的活動について、国内外の事例を通じて紹介し、農による豊かな地域社会をデザインするための基礎的知識を習得することを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 14 御手洗 洋蔵) (5 森田 茂紀/3回) 地域におけるバイオマスの生産と利用について、バイオマスタウン構想・バイオマス産業都市構想や東日本大震災復興支援における、事例紹介を通して解説する。 (10 松田 浩敬/6回) 国内外の農村地域における住民主体によるコミュニティデザインの現状について事例紹介を通して解説する。 (14 御手洗 洋蔵/6回) 国内の都市部における市民の農的活動を介したコミュニティデザインについて、事例紹介を通して解説する。</p>	オムニバス方式
	活用動物飼育学	<p>(概要) 動物のもつ機能を発見し暮らしに利活用することで幸福 (well-being) の実現を目指す実践的な教育・研究には、その対象となる動物を有することが不可欠である。しかし、動物本来の生理・生態に応じた適切な飼育による維持管理には動物に対する深い知識と洞察力が必要とされる。本科目では、学内教育研究施設で飼育されている動物を教材として、観察の手法や適正管理の実践について学び、動物を観察する際の視点や動物の適正管理に必要な知識を身につけることで、想定される実際の現場において状況に応じた適正管理をデザインする応用力や管理のための基本的な技術力の修得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 15 森元 真理) (4 土田 あさみ/5回) 動物飼育にかかわるルールを基本として動物飼育の基本や健康管理についての知識を学び、実際に動物飼育の現場見学して飼育作業を習得する。さらに、飼育施設における各種条件を抽出して想定される実生活における飼育環境を考案し、動物の特性に応じた動物福祉を考慮した飼育環境をデザインするための知識の応用力を養うことを目指す。 (15 森元 真理/10回) 動物に対する観察の視点やアニマルウェルフェアを考慮した飼育環境作りについて解説する。「観察」では、実際の動物を対象にスケッチ等の手法を用いて目的に応じた観察・記録方法について学び、日々の飼育環境や健康状態の点検・記録に必要な方法を修得することで、管理者間での情報の共有や他者に伝わる観察記録を作成する重要性について理解する。また、「飼育環境デザイン」では、各動物種の特性とアニマルウェルフェアに配慮した飼育環境基準、実際の飼育環境の維持と改善に必要な評価の視点や環境エンリッチメント等について学び、動物の機能を開発、活用していく上で忘れてはならない動物への配慮の重要性について理解する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		食品分析学	<p>食品分析学とは食品を構成する種々の成分を分析する手法について研究する学問である。本講では食品の一般成分分析など化学的な分析から最新の機器分析に至るまで食品の分析に関する手法からその原理について展開する。加工・製造した食品を多角的に評価するための知識の習得を目指す。</p> <p>食品の一般成分分析に関する実験手法の原理とその実際について理解を深めるために、食品化学の概要、水分、タンパク質・炭水化物・脂質・灰分や食物繊維・酵素の分析方法等を学び、さらに食品の機能性成分分析に関する実験手法の原理とその実際についても理解を深める。</p>	
専門教育科目	学科専門科目	専門コア科目	<p>生物介在療法学</p> <p>(概要) 人の進化に寄与した自然や動植物とのかかわりは、現代人の心身の健康増進や機能回復だけでなく、複雑化した人間関係の修復に効果が期待できる。本講義では「生き物」がもつ療法的特性と効果に着目し、園芸療法や乗馬療法をはじめとした生物介在療法の成立要件と評価手法を事例を基に解説する。閉じこもり、引きこもり、虐待、うつ病、愛着障害、適応障害、コミュニケーション障害など、現代社会で誰もが関わらうる諸問題を取り上げ、医療費や人件費削減が急務である日本社会における持続可能な療法支援を農学的見地から考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 9 藤岡 真実) (6 川嶋 舟/7回) 動物介在療法の基礎と実践を学ぶ。生きることに課題をもつ人が社会に居場所を持てるようにするための支援方法や、私たちの生きる社会を後世に引き継げるための必要となる社会システムについて理解を深める。具体的には、動物介在療法、動物介在療法の対象、動物介在療法の内容と制度、動物介在療法における適切な支援と介助、障害者に対する支援(支援制度・家族関係)、発達と教育、障害と社会対応などを網羅して解説する。</p> <p>(9 藤岡 真実/8回) 本講義では、園芸や農耕の療法的活用に関する歴史的背景を解説し、日本で独自に発展した園芸療法について考察する。また、心身機能のリハビリテーションに適した植物選択、集団技能獲得のための植物介在活動、植物や自然を介在した心理検査(バウムテストや風景構成法)など、実際に医療分野で用いる手法に触れ、学生が実際に体験できる参加型授業を展開する。医療・福祉の専門職だけでなく、地域を構成する一人一人が実践できるユニバーサルシステムの構築に向けて園芸療法を有効的に活用するための基礎知識を習得することを目的とする。</p>	オムニバス方式
		サイエンスコミュニケーション論	<p>(概要) 科学の急速な発達に伴い、科学者と市民との乖離が進んでいるだけでなく、科学だけで決定のできないトランスサイエンス問題が発生している。また、科学の果たす役割の拡大や変容に伴い、研究不正などに象徴される倫理問題も浮き彫りになってきた。このような状況を改善して、科学の現場とエンドユーザーとしての市民、企業、社会をつなぐサイエンスコミュニケーションへの期待が高まっている。この授業では、サイエンスコミュニケーション論の体系化を図り、単なる技術論に陥ることなく、主要なトピックスを考察をすることを通じて、サイエンスコミュニケーターを養成する基礎的な視点を与えることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 1 長島 孝行) (1 長島 孝行/9回) サイエンスコミュニケーションに関する主要な論点を整理するとともに、サイエンスコミュニケーションの具体例を取り上げ、ツールの問題を含めて概説する。</p> <p>(5 森田 茂紀/3回) 科学・技術・社会論(STS論)の視点を中心にして、サイエンスコミュニケーションの役割について考察する。</p> <p>(15 森元 真理/3回) サイエンスコミュニケーターの果たすことのできる役割とそのために必要なツールの開発について、具体例として教育の現場との連携事例を取り上げながら解説するとともに、他の場面におけるサイエンスコミュニケーターの携わり方についても概説する。</p>	オムニバス方式
		栄養調理学	<p>(概要) 調理栄養学とは調理やそれによる食品材料の変化さらには調理された食品の栄養機能について研究する学問である。本講では食品材料の基礎知識、調理による変化や摂食後の栄養機能などについて講義を展開し、食品開発に必要な知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 3 谷口 亜樹子) (3 谷口 亜樹子/5回) 栄養調理学の概要、食品材料の調理と物質の変化1, 2, 3, 4について学び、食品材料の調理と物質の変化について理解を深める。</p> <p>(8 野口 治子/5回) 食品材料に含まれる機能性成分について理解を深めるために、農産物に含まれる栄養成分、畜産物に含まれる栄養成分、水産物に含まれる栄養成分、その他の食品に含まれる栄養成分、特殊な栄養成分について学ぶ。</p> <p>(12 風見 真千子/5回) 食品に含まれる栄養素の摂食後の代謝について理解を深めるために、糖代謝タンパク質(アミノ酸)の代謝、脂質代謝、ビタミン・無機質の代謝を学び、最終回でこれまでの講義内容を統合して解説する。</p>	オムニバス方式

科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		食品管理学	<p>(概要) 食品には安心・安全であることが社会からも求められている。食品管理学では食品の加工から流通における管理について学ぶ。その範囲は食品の保蔵やパッケージングさらには工場管理など多岐にわたる。本講義を通じて食品の管理方法について理解を深め、食品の衛生的に保ち、消費者に提供するための知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 2 多田 耕太郎) (2 多田 耕太郎/3回) 概論および食品管理の重要性について理解を深めるために、食品管理学概論(食品管理学の概要)、食品衛生と法規(食品に関する法律や規格)、食品に関する規格(食品の安全に関する規格)を学ぶ。 (3 谷口 亜樹子/3回) 調理環境における食品の管理について理解を深めるために、調理環境における食材の管理方法、調理環境における食材の保存方法、調理環境における衛生管理、について学ぶ。 (8 野口 治子/3回) 食品の流通管理・パッケージングについて農畜産物の流通、加工食品の流通、食品の包装(加工食品に用いられる包装)について学ぶ。 (11 入澤 友啓/3回) 食品の保蔵の原理と実例について理解を深めるために、食品の腐敗とその原因について、食品の保蔵とその原理(塩蔵、缶詰技術など)について学ぶ。 (13 小泉 亮輔/3回) 食品工場管理について理解を深めるために、食品製造における事故(食品製造で起こる事故)、食品製造における衛生管理(食品製造における衛生管理の実例)、HACCP、を学ぶ。</p>	オムニバス方式
		バイオミクリー論	<p>(概要) 地球上に暮らす生物は、多岐にわたる戦略や機能性を利用して、様々な生態条件下で生きている。生物の持っているこの機能性、すなわち構造等を模倣するテクノロジーをバイオミクリーという。この授業では、近年、世界各国で急速に発展しているバイオミクリー、この技術に基づくバイオエコノミー戦略の展開について、事例解説を中心に考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 7 櫻井 健志) (1 長島 孝行/3回) バイオミクリーの概要とバイオエコノミー戦略を含めバイオミクリーの目指す方向性について解説し、具体的事例を紹介しながら製品についても説明する。 (7 櫻井 健志/12回) 生物模倣型ロボットを始めとしたバイオミクリーの様々な具体例について事例を取りあげ、そのメカニズムについても詳細に解説する。さらには今後の展望についても論じていく。</p>	オムニバス方式
		ESD概論	<p>(概要) 持続的な社会をデザインして人類のwell-beingを実現するには、地球・国家レベルから地域・家庭・個人レベルまでの様々な面における努力が必要となる。このような活動を効果的に進めるためにESD(education for sustainable development; 持続的開発のための教育)の普及が期待されている。本科目ではESDの考え方・歴史的な経緯・政策概要を踏まえたうえで、学校教育や社会教育の場での実践事例の紹介を通して、現状と課題を理解し、今後のあり方について考察することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 5 森田 茂紀) (5 森田 茂紀/3回) ESDの考え方・歴史的な経緯を解説したうえで、学校教育・社会教育などにおける事例を概観する。また、東日本大震災および復興支援における事例の紹介も含める。 (10 松田 浩敬/6回) 国連大学における活動事例を含め、内外におけるESDの優良事例を紹介しながら、現状と課題を理解するとともに、今後のあり方について考察する。 (14 御手洗 洋蔵/3回) ESDの重要な要素の一つである食育、特に児童期における食育について、日本における現状や課題について事例を基に解説する。 (15 森元 真理/3回) 動物を活用したESDの種類とその概要について、保育施設や教育機関、農場等における子ども(そこに携わる大人も含む)を対象とした多様な取り組み事例(環境教育、食農教育など)を紹介しながら解説するとともに、それぞれの現状の課題と今後のあり方についても考察する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	農福医連携デザイン農学	<p>(概要) 私たちの生活を基盤とする農学について、福祉領域や医療領域との新たな連携方法について学ぶ。農福連携や医福食農連携について、その実際例と共にモデル構築方法について学び、さらに、その延長戦にある就労支援や生活支援、地域活性化などを学び、次世代の私たちの生活スタイルそのものについて新しいモデルを提唱できるような人材を育成することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 6 川嶋 舟) (6 川嶋 舟/9回) 社会的弱者が社会と関わりを始め、関わり続けられるための生活モデルや就労モデルについてその構築とマネジメントについて学び、誰もが生きることのできる社会を構築することを目指す。さらに、農学や福祉領域にある様々な資源の今までに注目されていない機能について分析し、農業、福祉、医療の連携に役立てる。具体的には、農福医連携、社会的弱者、生活支援と生活モデルの構築、地域活性化と農福連携について、就労支援モデルの構築、就労支援モデルの実際、生活支援および就労支援モデルのマネジメント、社会に内包される構造的な問題、社会的弱者も参加できる社会システム(モデル)の提唱と普及方法などを網羅して実践的につながらよう解説する。</p> <p>(9 藤岡 真実/3回) 本講義では、農学を基盤とした医療・福祉の専門家である園芸療法士の役割と関連機関との連携のあり方について、具体的な事例を基に解説する。今後ますます加速する日本の少子高齢社会に対応するためには、医療費や介護費の削減は欠かせない。本講義を通して、農学を基盤とした人材育成と新たなサービス展開を創造する視点を養成する。</p> <p>(14 御手洗 洋蔵/3回) 持続的な地域社会を展開するにあたり、市民ボランティアは欠かすことのできない存在になりつつある。特に病院では地域の憩いの場となるべく、庭園を配置し一般に解放するところも増えており、その管理をボランティアが担う場合がある。そこで、本講義では農関係者がボランティアとして病院等の特殊環境で活動する際の注意点や課題について、事例をとりあげて解説する。</p>	オムニバス方式
	食品機能学	<p>(概要) 食品に含まれる成分や栄養素とそれらの機能について講義を行う。さらに、農産物および畜産物に含まれる機能性成分について幅広い知識を得るよう講義を展開し、機能性食品をデザイン・開発するうえで必要な知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 3 谷口 亜樹子) (2 多田 耕太郎/3回) 乳に含まれる機能性成分や生体調節機能について理解を深めるために、乳に含まれる機能性成分や生体調節機能に関する講義を3回に渡って行い、必要な基礎知識を習得する。</p> <p>(3 谷口 亜樹子/3回) 食品の機能性の概論や機能性食品の市場、ニーズ、機能性を有する糖質などについて、その構造や生体調節機能を理解するために、食品機能学の概要、機能性食品を取り巻く食品市場、機能性を有する糖類の構造や生体調節機能について学ぶ。</p> <p>(8 野口 治子/3回) 機能性を有するポリフェノール類などについてその構造や生体調節機能について理解を深めるために、機能性を有する糖類の構造や生体調節機能、機能性を有するポリフェノール類の構造や生体調節機能、機能性を有するイソプレノイドの構造や生体調節機能、について学ぶ。</p> <p>(12 風見 真千子/3回) 機能性を有する脂質についてその構造や生体調節機能について理解を深めるために、機能性を有する油脂の構造や生体調節機能、機能性を有する油脂の構造や生体調節機能、機能性を有するその他植物由来成分の構造や生体調節機能、について学ぶ。</p> <p>(13 小泉 亮輔/3回) 肉・卵に含まれる機能性成分や生体調節機能について理解を深めるために、肉に含まれる機能性成分や生体調節機能に関する講義を2回、肉に含まれる機能性成分や生体調節機能に関する講義を1回行い、必要な基礎知識を習得する。</p>	オムニバス方式
	食品微生物学	<p>(概要) 食品微生物学は微生物の応用・利用について研究する学問分野である。本講では微生物の形態や分類などの基礎的な知識から発酵に代表される微生物の有益な働きなど多岐にわたる内容について講義を展開し、微生物の利用や制御に関する知識の習得を目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 2 多田 耕太郎) (2 多田 耕太郎/4回) 発酵食品を例に有用微生物の働きについて理解を深めるために、アルコール類(アルコール類の製造に関する微生物)、発酵魚介製品(発酵魚介製品の製造に関する微生物)、畜肉発酵食品(発酵ソーセージや生ハムなどに関する微生物)、発酵乳製品(チーズやバターに関する微生物)、その他の発酵食品(その他の発酵食品に関する微生物)について学ぶ。</p> <p>(11 入澤 友啓/6回) 微生物に関する基礎的な知識、および発酵について理解を深めるために、総論(発酵と腐敗など微生物の役割)、微生物の分類(微生物の種類やその分類)、微生物の増殖、発酵食品(日本や世界の発酵食品)、大豆発酵食品(大豆を原料とした発酵食品)について学ぶ。</p> <p>(13 小泉 亮輔/5回) 食品に関係する微生物の有用酵素と有害微生物の制御について理解するために、微生物酵素(食品加工への微生物酵素の利用)、食中毒(食中毒に関与する微生物)、微生物制御(1)(原材料から消費までの微生物制御)、微生物制御(2)(HACCP)、について学び、最終回ではこれまでの講義を総括して理解を深める。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		生き物活用法	<p>(概要) 本科目は、環境や生き物に配慮した、社会的、福祉的にサステナブルな生き物活用手法をデザインできる実践力を身につけることを目的とする。すなわち、授業では、学生自らテーマを考え、そのテーマに沿って目的を設定し、目的にみあった生き物を選択し、生き物を活用するための実践を計画して模擬的に実施し、生き物の選択の妥当性・取扱の妥当性、活用手法の妥当性等を評価するところまでの一連の流れを扱う。そのため、それまで授業で学んだ事柄を振り返り、これを実際に応用するという、実践的な学びをこの授業のねらいとする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 4 土田 あさみ) (4 土田 あさみ/7回) 生き物を活用する場の構造を復習して、活用に必要な要件を理解する。その上で生き物活用のためのテーマ、目的、対象者を設定し、さらに適切な生き物を選定し、目的に沿った活用プログラムを評価方法とともに学生自ら考案して、模擬実践を行ない、実践力を身につけることをねらいとする。さらに、模擬実践の振り返りを討論形式にて行ない、今後に向けた課題も合わせて抽出し、課題を見つけて評価し今後につなげていく力を養う。</p> <p>(6 川嶋 舟/3回) 人間と動物の新たな関わりについて、福祉や医療領域で利用方法や動物の有する新しい役割(機能)や特性についての知見を学ぶ。具体的には、人間と動物の関係、社会的弱者に対する動物の効果、人と生き物との関わりについての評価手法とする。</p> <p>(9 藤岡 真実/5回) 身近にある有用植物とその活用法について理解を深め、植物のもつ「色」「香り」「形」「質感」「時間性」をうまく活用するために必要な基本的知識と技術を習得する。また、期待する効果(教育的、福祉的、療法的)に応じた難易度設定やグループ設定の実践手法を学ぶことにより、持続可能なソーシャルデザインに資する人材育成につなげる。</p>	オムニバス方式
	学際領域科目	動物管理学	<p>(概要) 法律を遵守し適正に動物を管理することは、動物を飼養管理する者にとって動物に対する責任及び動物福祉の上で不可欠であり、人間社会にとつての義務である。本講では、人と関わる多様な動物の管理について法律も交えながら解説し、動物飼養が単なる給餌などの世話やふれあいだけでは終わらないことを学ぶとともに、動物にとつての環境を考慮しながら飼育することの重要性について理解することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 44 林田 まき) (15 森元 真理/3回) 動物飼養には、様々な目的がありその目的によって管理方法は大きくことなる。本講義では、生涯動物の飼養環境、管理方法について網羅的に解説する。</p> <p>(37 松林 尚志/2回) 人と野生動物が共存するうえで、野生動物の生態や行動特性の理解、個体数や生息環境の管理は不可欠である。本講義では、野生動物による農林業被害問題に着目して、シカやイノシシの生態や行動特性、被害の背景と現状、そして総合的被害管理について解説する。</p> <p>(44 林田 まき/5回) 動物飼養において給餌により供給される栄養は、動物の健康や発育に大きな影響を及ぼす。本講義では、管理者に求められる給餌栄養について簡潔に解説する。</p> <p>(48 黒澤 亮/5回) 動物には、家畜のように大きな飼育規模で飼育し、寿命を全うしないことが前提となる動物がいる。本講義では、非生涯動物の飼養環境、管理方法について網羅的に解説する。</p>	オムニバス方式
		農業気象学	<p>農業生産に及ぼす気象環境要因には、温度、湿度、気流、光の質と量、二酸化炭素濃度など様々な因子がある。本講義では、これら気象環境要因が農業生産や自然生態系に及ぼす影響を、気象災害、植物工場、地球温暖化という観点から説明する。一部、気象予報士の資格試験に関係する内容を含む。</p>	集中
		植物栄養学	<p>植物は様々な自然環境下で光合成と土壌から吸収した養分水分によって生活を営むと同時に、地球上の生物の生命を支えている。本講義ではまず、生物生産の場において植物が正常に生育し、十分な収量をあげるために必要な養分の種類と体内での生理的働き、養分吸収機構を概説する。次に、植物が受ける数々のストレスについて解説し、どのようにストレスに反応し生育しているのか、その機構を説明する。一方、生態系維持や環境汚染との関連から植物栄養学の観点から農業生産現場の問題点を挙げ、施肥理論と最適施肥体系を考慮して発生要因と解決法を説明する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	動物解剖学	<p>(概要) 動物の身体構造や外部形態の特徴と運動機能の関係、動物の体の運動や支持に関する骨格及び筋の形態について学習し、顕微鏡的な組織形態についてその構造と機能を理解する。動物の体と器官の解剖学的用語と機能を習得し、動物種間に観察される形態解剖学的な差異と器官が担う機能と構造の関係を理解する。</p> <p>オムニバス形式／全15回(単位認定者：23 加田 日出美) (6 川嶋 舟／4回) 動物の筋肉および循環器について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。 (23 加田 日出美／3回) 動物解剖学の概要、動物の消化器について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。 (42 鳥居 恭司／3回) 動物の呼吸器および神経系について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。 (43 野口 龍生／5回) 動物の骨格および泌尿生殖器について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。</p>	オムニバス方式
	植物生理生態学	植物は多様な環境の中で環境と相互関係を持ちながら生活している。植物生理生態学は、こうした多様な環境に対する植物の応答を生理学、生態学的見地から明らかにすることを目的とした学問である。この講義では、植物を取り巻く環境に対する植物の反応を基本的な生理反応である光合成、呼吸、水分代謝などに面から明らかにするとともに、それら植物の生理的応答の植物の生活における意義について考える。	
	農業経営学	農業生産を担当する経済主体としては、農家や生産組織等の農業経営体がある。この経営体は私経済的利益を追求する持続的組織体であるが、同時に限られた生産資源を保全・活用し生産力を維持・向上させる社会的責務を負っている。農業経営学は、従来農業経営学として蓄積されてきた学問を基礎に、それを応用・発展させることを目的とする。すなわち、農業経営体の管理・運営・組織に関する原理や問題点及び実践的手法の体系的研究を行う。本講義では、国際化時代におけるわが国の農業生産が環境負荷を抑えて持続的発展を図るために必要不可欠な、優れた経営体の育成と発展のメカニズムについて理論的かつ実証的に学ぶ。本講義では、農業経営学の基礎的概念をマスターし、農業の現場を理解したり、農村調査に活用できる能力を養うことを目標とする。	
	生命科学	生物学が生物の多様な形や働き、そして生活や進化を対象とするのに対して、生命科学は、その多様な生物に共通して認められる生命現象をとらえ、その背景にあるメカニズムを解明する学問分野である。近年の生命科学の発展は著しく、マクロな視点からミクロな視点までの様々なレベルにおいて多くの成果が得られている。この講義では、生命現象の集約とでもいべき生物の発現現象に着目し、発生生物学の視点から生命科学の全体像を解説する。なお、近年の発展の著しい発生工学に関する内容も含める。	
	自然再生技術論	国土面積の約70%を森林が占め、地形的に急峻で、多雨なモンスーン気候下に置かれているわが国では、自然災害や開発行為で土壌が失われた傾斜地の自然再生技術(緑化技術)が発展した。本論では、主に不安定な急勾配斜面の自然再生に焦点をあて、自然再生技術の歴史的変遷と実例をベースに、自然回復の理念と技術について学習する。また、自然再生を実践する上で重要な基本的考え方やポイントについて理解を深め、近年社会的な要求が高まっている生物多様性に配慮した自然再生(自然回復緑化)を自ら実践するための実務的なスキルの習得を図る。	
	植物生長調節論	植物は、芽を出して茎を伸ばし葉を広げ根を張り、やがて花を咲かせて実をつける。この植物の生活環を円滑に進行させる役割の一端をになうのが植物ホルモンである。植物ホルモンは、遺伝的プログラムと環境情報の仲立ちをして、ごく微量で細胞・組織・器官に作用し、植物体の多様な反応を司っている。植物ホルモンの機能・役割を解き明かしながら、農業生産における植物成長調節剤としての利用について解説する。さらに、近年研究が進んできた光・温度などの環境調節による植物の成長調節技術についても解説する。上記の内容から、農作物の成長・開花調節技術の基礎的理解を図り、生産現場での有効な利用法を工夫できることを目標とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	分子生物学	<p>(概要) 20世紀中頃に生物の遺伝情報をコードするDNAの構造が解明されて以来、生物に関する様々な現象(生理、生態、発生、行動、進化 etc)が分子レベルで明らかにされるようになってきた。このように分子生物学は生物に関わる多くの分野において必要とされる知識であり、農学を学ぶ学生には大いに役立つことと思われる。本講義は、動物、植物、微生物も隔てなく細胞をベースにDNA、遺伝子、ゲノム、タンパク質の構造や機能を理解し、生命現象を分子レベルで考察する知識を修得する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 46 三井 裕樹) (20 岩田 尚孝/3回) ゲノム情報をもとに遺伝子のコピー数を測定したり、配列を推測したり、遺伝子の発現量を測定したり制御する方法について解説する。 (26 佐々木 剛/2回) この地球上に細胞が誕生するに至った経緯を説明する。地球上に様々な分子が蓄積されるとともに起きた分子間の競争による洗練された代謝系の進化と安定的な遺伝情報伝達物質の獲得が大きく関わっていたことを解説する。 (41 白砂 孔明/3回) タンパクの発現量を比較する方法やタンパクの発現量をもとに細胞を分離したりする方法について解説する。 (46 三井 裕樹/5回) 細胞を構成する分子と種類の性質、核酸の構造や特性、DNA複製のしくみを解説する。また、ゲノムの構造とDNAの種類について説明し、生物の進化・多様性をゲノムレベルから考える。 (49 小松 憲治/2回) ゲノム情報の取得方法や、その情報を基にオミックス解析等を駆使して遺伝子を機能を調べる方法について解説する。</p>	オムニバス方式
	農産物マーケティング論	本講義の目的は、農家や農協などの農業関連企業がマーケティング戦略を展開する上で不可欠となる知識や手法を習得させることにある。マーケティングの基本的な枠組みはコトラーの著作を中心に紹介するが、農産物の特性や農産物流通の実態や具体的な農産物のマーケティング活動の事例も併せて紹介する。講義とともにレポート課題の実施を通じて、実践的なマーケティングの考え方の習得を目標とする。	
	植物防疫論	植物防疫とは何か。なぜ必要なのか。植物に有害な病害虫の侵入・まん延を防止し、日本の「農業」と「緑」を守るために、輸出入植物及び国内植物における植物防疫の理論と方法を解説し、リスクアナリシスの概念とその適用について理解するとともに、病害虫防除の理論を理解する。具体的には、病害虫の発生予察の手法、病害虫被害や鳥獣害被害の実態とその対策、農薬取締制度、農薬の安全性確保、植物検疫の内容について理解を深める。	
総合化科目	専攻基礎実験実習・演習(一)	本科目は、デザイン農学専攻別実験実習・演習に引き続き、各研究室の専門分野のスキルと知識を身につけるための実験実習・演習科目である。各専攻における実習では、卒業論文のテーマ決定とテーマ毎の実験・調査手法の実習を行い、卒業論文への準備とする。本科目では、論理的・多面的に物事を考える能力の習得を到達目標とする。	共同 ※ 実習: 60時間 演習: 30時間
	専攻基礎実験実習・演習(二)	本科目は、専攻基礎実験実習・演習(一)に引き続き、各研究室の専門分野のスキルと知識を身につけるための実験実習・演習科目である。各専攻における実習では、卒業論文のテーマ決定とテーマ毎の実験・調査手法の実習ならびに演習を行い、卒業論文への準備を具体的に進める。本科目では、論理的・多面的に物事を考える能力に加え、プレゼンテーション能力の習得を到達目標とする。	共同 ※ 実習: 60時間 演習: 30時間
	専攻応用実験実習・演習(一)	本科目は、専攻基礎実験実習・演習(二)に引き続き、各研究室の専門分野のスキルと知識を習得するための実験実習・演習科目である。各専攻において卒業論文のテーマ決定とテーマ毎の実験・調査を行い、卒業論文への応用と、論理的・多面的に物事を考える能力の習得を到達目標とする。	共同 ※ 実習: 60時間 演習: 30時間
	専攻応用実験実習・演習(二)	本科目は、専攻応用実験実習・演習(一)に引き続き、各研究室の専門分野のスキルと知識を習得するための実験実習・演習科目である。各専攻において卒業論文のテーマ決定とテーマ毎の実験・調査を行い、卒業論文への応用と、論理的・多面的に物事を考える能力、プレゼンテーション能力の習得を到達目標とする。	共同 ※ 実習: 60時間 演習: 30時間
	卒業論文	本科目は、デザイン農学科で習得した知識基盤を基に各自が興味を持った分野について研究対象および方法を明確化し、実験または調査を実施して新たな知見や結論を導き出す過程を体得することを目的とする。生物機能開発学、食資源利用学、食機能科学、社会デザイン農学、生活デザイン農学、各研究室で開講し、各研究室の専門分野の研究を行う。本科目では、専攻応用実験実習・演習(二)の到達目標に加え、自主的・継続的に学習し、与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力を習得することを到達目標とする。	

(注)

1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。

2 私立の大学若しくは高等専門学校に於ける学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
畜産学専攻(M)	10	—	20
バイオセラピー学専攻(M)	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	25	—	50
農芸化学専攻(M)	12	—	24
醸造学専攻(M)	—	—	—
食品栄養学専攻(M)	12	—	24
林学専攻(M)	12	—	24
農業工学専攻(M)	8	—	16
造園学専攻(M)	12	—	24
国際農業開発学専攻(M)	12	—	24
農業経済学専攻(M)	10	—	20
国際バイオビジネス学専攻(M)	12	—	24
農学専攻(D)	5	—	15
畜産学専攻(D)	4	—	12
バイオセラピー学専攻(D)	3	—	9
バイオサイエンス専攻(D)	6	—	18
農芸化学専攻(D)	5	—	15
醸造学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)	2	—	6
林学専攻(D)	4	—	12
農業工学専攻(D)	2	—	6
造園学専攻(D)	3	—	9
国際農業開発学専攻(D)	2	—	6
農業経済学専攻(D)	5	—	15
国際バイオビジネス学専攻(D)	5	—	15
環境共生学専攻(D)	5	—	15
生物産業学研究科	—	—	—
生物生産学専攻(M)	7	—	14
アグアバイオ学専攻(M)	5	—	10
食品香料学専攻(M)	5	—	10
産業経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	262	—	585

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
畜産学専攻(M)	10	—	20
バイオセラピー学専攻(M)	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	25	—	50
農芸化学専攻(M)	12	—	24
醸造学専攻(M)	20	—	40
食品安全健康学専攻(M)	12	—	24
食品栄養学専攻(M)	12	—	24
林学専攻(M)	8	—	16
農業工学専攻(M)	12	—	24
造園学専攻(M)	12	—	24
国際農業開発学専攻(M)	12	—	24
農業経済学専攻(M)	10	—	20
国際バイオビジネス学専攻(M)	12	—	24
農学専攻(D)	5	—	15
畜産学専攻(D)	4	—	12
バイオセラピー学専攻(D)	3	—	9
バイオサイエンス専攻(D)	6	—	18
農芸化学専攻(D)	5	—	15
醸造学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)	2	—	6
林学専攻(D)	4	—	12
農業工学専攻(D)	2	—	6
造園学専攻(D)	3	—	9
国際農業開発学専攻(D)	2	—	6
農業経済学専攻(D)	5	—	15
国際バイオビジネス学専攻(D)	5	—	15
環境共生学専攻(D)	5	—	15
生物産業学研究科	—	—	—
生物生産学専攻(M)	7	—	14
アグアバイオ学専攻(M)	5	—	10
食品香料学専攻(M)	5	—	10
産業経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	282	—	625

→

専攻の設置(届出)

東京情報大学 総合情報学部 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

→

東京情報大学 総合情報学部 総合情報学科 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

→